



特攻観音堂と特攻平和観音像 (陸・海軍二体)



世田谷山観音寺特攻観音堂

報 特攻 会
 平成26年11月
 第102号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
 〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-1-1靖國神社遊就館内・地階
 電話 03 (5213) 4594
 F A X 03 (5213) 4596
<http://www.tokkotai.or.jp>
 振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
 発行人 羽淵徹也
 印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

第63回特攻平和観音年次法要……1	ファイリピン慰霊の旅・永富雅夫……22
スイス国営テレビ局東京特派員による元特攻隊長のインタビュー……7	永富章夫 両中尉を偲ぶ……22
全日本空挺同志会高野山慰霊祭に参列して……10	四式戦特攻「突入時とトリムタブ」……28
大分縣護國神社「特攻勇士之像」竣工奉告祭及び除幕式に参列して……11	満洲国と敗戦による引揚げ時……32
講演会「強運な台湾人青春」……13	世田谷観音文芸祭と奉納舞台演劇「天谷に散りゆく」……37
陸軍雷撃隊一四式重爆撃機「飛龍」特別攻撃隊・七生神雷隊……19	読者の声① 真正な日本人の懐中メモ……39
	読者の声② 沖繩が危ない！那覇市龍柱問題……41
	読者の声③ 《特集》神劍・宝剣・名刀の謎 源氏の重平・薄緑・長円……4342
	事務局からの報告等……4342

式衆入堂 世田谷山観音寺山主他
 駒撃神社宮司
 国歌斉唱 トランベット 堀田 和夫
 山主願文 特攻平和観音經 太田 賢照
 世田谷山観音寺山主 澤田 浩治
 神 儀 駒撃神社宮司 澤田 浩治
 修祓の儀・降神の儀・獻饌の儀
 祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀
 祭文奏上 公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
 理事 杉山 蕃
 揖 擗 世田谷区長 保坂 展人
 一誠流 吉野 一心
 龍笛 逢坂 龍信
 焼 香 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
 理事 杉山 蕃
 御遺族・御來賓代表
 世田谷区長 保坂 展人
 御遺族・御來賓各位
 会員・一般参列者全員

日時 平成26年9月23日(火)
 秋分の日 14時～15時20分
 場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂
 参列者 御遺族30名を始め御來賓・会員等約180名、他に当日受
 付の一般参列者40数名、合計約230名
 式次第
 司会 及川 昌彦
 倉形 寛

玉串奉奠 顕彰会理事長、世田谷区長、直会
 15時30分～16時30分
 献 奏 甲飛喇叭隊第11分隊 隊長 原 知崇
 「我が戦友よ」「海ゆかば」
 トランベット 堀田 和夫
 指揮 大穂 孝子
 有志合唱団と共に全員合唱
 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
 池前祭 山主 読経、神官 修祓・祝詞奏上後、式衆退場
 式衆退堂

生もなく死もなくすでに我もなし
 なげかざらめやますらをの友
 いさぎよく風にちりにし花のごと
 御国のためにただ進みけむ

北白川房子元内親王殿下御歌
 笛 逢坂 龍信
 吟 吉野 一心

第63回特攻平和観音年次法要

平成26年9月23日(火)秋分の日、世田谷山観音寺特攻観音堂において、第63回特攻平和観音年次法要(注1)が厳かに、盛大に斎行された。

今年是全国各地で異常な猛暑日、前例のない集中豪雨や強風・竜巻と、異常気象が続いたが、さすがに彼岸を迎えてこの日は猛暑も一段落し、秋冷とまではいかないまでも、爽やかな秋空となり、年に一度の年次法要が無事斎行できたのは何よりであった。正に、英霊の御加護と言うべきであろう。今年も年次法要は、世田谷山観音寺



本堂回廊に展示の特攻絵画



吉田 茂元総理大臣書「世界平和の礎」



元竹田宮・竹田恒徳初代会長書「奉安 特攻平和観音」

山主太田賢照僧正と地元の氏神・駒繫神社澤田浩治宮司の共斎による神仏習合で行われた。太田賢照山主の提唱により始められた神仏習合による法要も既に6回目となり、すっかり定着した感がある。神仏習合については、既に何度か紹介した(注2)が、神と仏を同様に崇拝するという日本人の持つ優れた融和の精神の表れである。既に世界平和運動の一環として進められているが、現在の世界の情勢の中で、イスラム教徒の国々とキリスト教徒の国々の対立、またその中でそれぞれ独自の宗派の対立が、世界平和の大きな脅威となっている。このような時にこそ、

融和、ないし大和の精神、和を尊ぶ心をもってお互いを尊重することが、その解決策の一助になるのではないかと。なお、付言すれば、世田谷山観音寺の創建者である先代山主太田陸賢和尚は、青年の頃、明治41年に来日して草津に居を構え、癩(ハンセン氏)治療所として奉仕活動を続けていたアメリカ人宣教師M・H・コンウォール・リー女史の献身的な行為に深い感銘を受けてキリスト教に帰依するようになり、女史の手で洗礼を受け、「ニコラス」というクリスチャン名を授けられた。そして、更に深くキリスト教を学ぼうとして海外留学を思い立ったところ、

先々代から強く慰留され、得度することを要請されて、遂に翻意し、得度して陸賢を名乗り、仏教徒としての道を歩むことになった、しかし、得度後もキリスト教関係者との交流は変わりなく続けられたという。更にまた、陸賢和尚は、神官の資格も取り、戦時中は王子稲荷神社の禰宜として奉仕されたということである。そのような宗教に対する考え方、志向を現山主も継承しておられるのではないかと筆者は拝察するのである。

松や樺、楓や桜などの大木が茂り、普段は静寂に包まれている世田谷山観音寺境内も、この日は午前中の早い時間から会員有志や奉仕の方々による受付準備、祭壇設営、特攻絵画展示等の作業で賑わっていた。

絵画展示は昨年(陸士61期)の指導の下、復活展示することとなった。絵画は、陸士61期生の故松本武仁画伯の筆になるものである。松本画伯は、戦後独学で絵画を勉強し、戦没者慰霊のため、数十点の油絵を制作された。それらの絵画は、靖國神社の参道や特攻平和観音年次法要などで展示され、多くの人々の感銘と賞賛を受けていたが、平成14年3月31日に松本画伯が逝去されたことなどにより、展示が取り止めとなっていたも

のであるが、特攻隊戦没者の慰霊顕彰と、併せて松本画伯の御遺志を継ぐため、今後とも展示を続けたいものである。

法要準備作業が、着々と進められている中、客殿の旧小田原代官屋敷内では、後に記載するように、スイス国営テレビ局(TSR)の東京特派員ジョージ・パウムガルトナー(Georges

祭文

本日、平成26年秋分の日に、ここ世田谷山観音寺におきまして、御遺族・戦友及び関係者相集い、第63回特攻平和観音年次法要を斎行致すに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

今年(平成26年)は、特別攻撃隊と致しましては70年の節目を迎えようと致しております。英霊の皆様が、若い盛り(若)の生命を捧げられた事実は、未だに日本人の心に深く刻まれております。昨年来特別攻撃隊をテーマとした小説・映画が、ベストセラーになる等の盛り上がりを見せましたのも、前回も御報告致しましたとおりであります。

私ども特攻隊慰霊顕彰会もここ一

Baumgartner)氏とそのスタッフによる当顕彰会会員堀山久生元陸軍航空特別攻撃隊第194振隊隊長(陸士57期・陸軍中尉・大正12年(1923年)生まれ・91歳)に対するインタビュが行われ、筆者も立ち会いを求められた。その後の年次法要の取材を含め、外国人特派員・記者の取材を受けるのは初めてのことであったが、大変有意義な

年、靖國神社、当世田谷山観音寺におきましての年次追悼行事を始めとして、各県護国神社への「特攻勇士之像」の寄進、フィリピン・マバラカットを含む全国各地で執り行われます慰霊行事への支援・参加等、皆様を悼する各種の事業を着実に進めて参りました。中でも機関誌100回の記念誌を発行するに至り、特集号を発刊致しましたことを御報告申し上げます。

さて、我が国内外の情勢は、決して平穩に推移しているわけではありませぬ。ウクライナを巡るロシアと欧米諸国の激しい鏖戦、イスラム過激派の行動を巡る中東地域の紛争の激化等不安定化への厳しい兆しとも言える状況が続いております。我が国周辺におきましても、中国・北朝鮮の我が国への挑発的な行動が続いております。

インタビュ・取材であったと思う。真の日本人の持つ特攻精神が正しく外国にも伝えられることを願うとともに、対外発信を積極的に行うことの必要性を痛感するところである。

特攻観音堂前には沢山の美しい季節の花を盛った供花が並べられ、お堂の向かって左側にある故吉田茂元総理大臣の筆になる「世界平和の礎」の碑が

これらの諸状況に対し、私どもは、在天の皆様が、文字どおり生命を擲って守らんとしたものは何であったのか、という原点に立ち返り、毅然たる基本姿勢と柔軟なる対応により、国家百年の計の万全を図らねばなりません。

国内情勢においては、依然として東北大地震の復興は遅々としておりますが、消費税増額、集団的自衛権の解釈変更に係る閣議決定といった懸案の政策が実現し、党利党略から、大衆迎合に過ぎた傾向にあった政治が、本来の姿を取り戻し始めたことは、好ましい傾向として御報告せねばなりません。

さらに来年の終戦70年の節目には、恐れ多くも天皇、皇后両陛下のパラオ方面への慰霊行幸、啓が検討されている旨報道されました。誠に大御心の深さに感激致すところでありますが、同

一段と重厚さを加え、特攻勇士たちの偉業を想起させられた。英霊の方々が身を捨てて護ろうとしたこの国、この民族、引いてはアジア諸国の独立と平和。正にその尊い礎となられたのである。ビルマ(現ミャンマー)の初代首相バー・モウ氏も「特攻隊は、世界の戦史に見られない愛国心の発露であった。今後数千年の長期にわたって語り

時に、これを機に、戦没者慰霊に関わる私どもは、一層の努力をもって広く国民に活動の輪を広げて行かねばならないと考えている次第であります。

本年我が国は、台風・豪雨による災害の厳しい年でありましたが、初秋のこの日、英霊の皆様の前におきまして、国に殉じられた純粋なお気持ちに再度思いを馳せ、ともすれば安易に流れがちな人の業を自戒し、国への思いを強固に致す気持ちを振作し、皆様が斯くあれと望まれたであろう社会の実現に努力致すことをお誓いして祭文と致します。

平成26年9月23日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 杉山 蕃

御挨拶

第63回「特攻平和観音年次法要」の開催に当たり、ご挨拶申し上げます。

今年も酷暑と呼ばれるぐらい暑い夏でした。

天候が安定せずに集中豪雨など穏やかでない天候が続きました。広島市をはじめ全国で気象異変による犠牲者・被害者の方々が出ました。謹んでお悔やみとお見舞いを申し上げます。

さて、今年も特攻平和観音年次法要がやってきました。私は厳肅な気持ちで、この式典に臨んでいます。先の大戦で、青雲の志を抱きながら、その短すぎる青春のさなかに、尊い生命を賭して亡くなられた方々に、

心からの哀悼の誠を捧げます。

父母、兄弟を案じ、国のためにと、短い生涯を閉じて逝かれたことを思う時、戦争が終わり、平和な社会の中で今日までを生きてきた私たちも、胸をかきむしられる思いでいっぱいになります。こうして瞑目し、その最後の奇烈な姿を想像する時、私たちには言葉もありません。こうして、秋のさわやかな風を受けて、手と手をあわせて、頭をたれて、ご冥福を祈ります。

残されたご家族、ご親族の皆様、戦場で苦楽を共にされた旧友の皆様のご心痛はいかばかりかと察するに余りがあります。戦後日本の復興と繁栄は、青春の途上で尊い犠牲となられた方々によって築かれてきたと、改めて感じます。

かつての戦争を体験された方々のお和の礎」なのである。

継がれるに違いない。「カミカゼの精神、それは新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も打ち破ることのできない自己犠牲の精神、勝利のために死をいとわない精神である。」「神風の精神が減びない限り東アジアも決して滅びない」と述べている。

誠に、特攻精神こそ、我が国のみならず、東アジアの、そして、世界の「平

和の礎」なのである。やがて定刻14時、鍾楼での梵鐘三打で年次法要は始まった。打者航空自衛隊倉形寛空曹長、補助者同じく上田中俊彦3等空曹の心を籠めた打鐘の音は、嫋々として世田谷山の森に衍し、参列者の心を洗う。

話を直接お聞きする時間は、次第に限られたものとなってきています。私は「語り継ぐ」ということの重みを感じています。こうして、当事者として体験されたお話を直接聞く機会は、次第に限られた時間となっています。直接体験のない世代の私たちが、心を開いてお話をよく聞いて、次の世代に伝えることの役割を強く自覚していこうと考えています。

今年、1964年（昭和39年）の

東京オリンピック・パラリンピックの開催からちょうど50年目にあたります。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、これから

東京も、世田谷も、大きく変化していくことと思いますが、戦争体験者の方々のお話を、次の世代の子供たちに伝えていく努力を一層積み上げてい

要は進められた。

参列者一同起立し、元海上自衛隊東京音楽隊員堀田和夫氏のトランペット伴奏により国歌斉唱。続いて堂内では、祭主世田谷山観音寺太田賢照山主による願文奏上が行われたが、太田山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、

たいと思います。

特攻平和観音年次法要の開催にご尽力されている特攻隊戦没者慰霊顕彰会の皆様をはじめ関係者の皆様から長年にわたるご尽力に改めて心からの敬意を表させていただきます。

ご列席の皆様が末永くお元気で、貴重な体験をお子さんからお孫さん、そして後に続く世代へとお話しただけのことを期待しております。

結びにあたり、地球上すべての人々が平和で健康に生きることができるよう、世界の恒久平和を祈ります。

昭和26年9月23日

世田谷区長 保坂 展人

大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相対せんか誰か万斛の涙なきを得んや・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして



御挨拶・保坂展人世田谷区長



祭文奏上・杉山蕃理事長



献吟・吟 吉野一心・笛 逢坂龍信両氏



献歌・特攻隊戦没者慰霊顕彰会有志合唱団と共に

大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり。嗚呼尊い哉、嗚呼仰がん哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。真に特攻勇士は、護国の鬼神となつて散華され、今や平和守護の観世音菩薩となつて我ら衆生を見守つておられるのである。

代わつて、駒繫神社(注3)の澤田浩治宮司祭主となつて神儀が執り行われ、修祓の儀・降神の儀・献饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れる中、清らかに齋行

された。玉串奉奠の儀は、先ず太田山主に始まり、当慰霊顕彰会と御遺族の各代表によつて行われた。

次いで、堂前において、当慰霊顕彰会杉山蕃理事長による祭文奏上が行われた(祭文は別掲)が、その中で、特に、我が国内外の情勢が一層厳しい中であつて、御英霊の皆様が生命を擲つて護らんとしたものは何であつたか、という原点に立ち返り、毅然たる姿勢と柔軟なる対応により、国家百年の計の万全を図り、御英霊の御期待に応えなければならぬと強調された。

ついで、一誠流・吉野一心氏の吟、逢坂龍信氏の龍笛による献吟が行われたが、今回の御歌は北白川房子元親王殿下が特攻平和観音に参拝された時の御作とのことで、特攻隊勇士の真情を歌い上げられた御歌に、深い感銘を受けた。

続いて、当特攻慰霊顕彰会有志合唱団と共に参列者一同、大穂孝子女史の指揮、堀田和夫氏のトランペット伴奏により、献歌「我が戦友よ」と「海ゆかば」の二曲を歌い上げたが、英霊たちもさぞ、御霊安らかに唱和されたものと拝察する。ただ、献歌「我が戦友よ」は、年次法要の葉に歌詞は掲載されていたが、楽譜もなく、名曲ながら一般には余り知られていない曲であるためか、参列者の唱和が少なく、残念であつた。しかし、この曲を聴かれた戦場体験のある先輩方は、かつての戦場を想起し、亡くなった戦友を偲んで涙が出たと話しておられた。

次いで、奉納献奏として、旧陸海軍の軍装をした甲飛喇叭隊第11分隊(隊長原知崇氏)による国の鎮め等のラッパ吹奏があつたが、若く、きびきびとした挙動と共に、啾唳として悲愁漂う



法要会場・御遺族、御来賓席



献奏・甲飛喇叭隊第11分隊

その響きに、懐旧の念一人なるものがあつた。

終わって、当会代表・御来賓・御遺族を始め参列者一同祭壇前に進んで順次焼香を行った後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う「観世音菩薩・夢違い観音像」(注4)に向かい朗々と「般若波羅蜜多心経」の声明並びに神官による祝詞の奏上があつて、滞りなく年次法要の幕を閉じた。

引き続き、15時30分から境内で直会が行われたが、初めに、偕行社代表として前副会長齋須重一氏(陸士57期)の御発声により、御英霊に対し献杯を行った後、各テントでは、参列者相寄



焼香・御遺族

り、約1時間、和やかに杯を交わして歓談し、それぞれ来年の再会を約して解散した。誠に身も心も清められ、温められた一日であつた。

(注1) 特攻平和観音年次法要は、昭和27年5月5日、東京都文京区音羽の護国寺において、旧陸海軍関係者を中心に二体の「特攻平和観音像」(海軍は「神風特攻平和観音像」と称していた。)の合同開眼法要が営まれたのを第1回とし、以来63回目の年次法要といふことであつて、特攻平和観音奉戴以来満62年、特攻平和観音像制作以来63年の歳月が経過したことになる。本像は、終戦後、静岡市の清水寺住



池前祭・祝詞奏上

職吉井成純僧正と日光山輪王寺塔頭華嚴院住職関口直大僧正が、大東亜戦争全戦没者の靈魂成仏を發願し、法隆寺に願ひ出て秘仏「夢違観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作し、平和観音像として奉戴することの許可を得、昭和25年10月10日に平和観音会を發足させ、会の趣旨に賛同する者にこれを頒布し回向することとしたが、現存が確認されているものは、本特攻観音堂の二体と、鳥濱トメさんによつて知覧の特攻平和観音堂に奉安された一体、及び昭和21年から平成18年まで61回にわたり長年執り行われてきた海軍神風特別攻撃隊戦没者の慰霊法要「神風忌」が営まれていた東京都港区芝の増上寺塔頭安蓮社に奉安されている一体の計四体である。

陸海軍各一体の特攻平和観音像は、昭和26年5月、先代の太田陸賢僧正により開山された世田谷山観音寺境内に都下仙川に在った元華頂宮邸の持仏堂を移築、特攻観音堂とし、昭和31年5月18日に落慶法要を営んで以来毎年法要を行つており、護国寺での開眼法要以来通算して今年、第63回目の年次法要を齎行することとなつた次第である。

なお、世田谷山観音寺では毎月18日、特攻観音堂において有志による内輪の月例法要を営んでいる。そして、

大規模な年次法要は、毎年秋分の日の9月23日(又は22日)に営んでいるものである。

宗教、神道、仏教の各界代表者による設立5周年記念シンポジウムが行われた。

(注2) 神仏習合に関しては、平成21年11月発行の当会会報『特攻』第81号

(2頁)に掲載したように、平成21年6月11日、高野山真言宗総本山金剛峯寺金堂において、近畿7府県の有名な

151社寺でつくる「神仏霊場会」(現会長＝北河原公敬・東大寺長老)の主

催で「神仏合同国家安泰世界平和祈願会」が盛大に齋行されて以来、定例法

要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むことにな

ったことであり、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動

の起ころ以前は盛んであった、神仏を一緒に崇拜する精神風土を取り戻そう

と、平成20年3月に設立され、世界平和運動の一環として、この運動を進めて

いるとのことであり、この傾向は、今後ますます盛んになるものと思われる。

近年、関東においてもその運動は活発に行われており、昨平成25年は、伊勢神宮の第62回式年遷宮の年に当たり、また、神仏霊場会設立5周年でもあったところから、11月17日、上野の東京国立博物館・平成館において、同

会主催により、「日本人の信仰・神と仏をめぐって」というテーマのもと、

宗教学、神道、仏教の各界代表者による設立5周年記念シンポジウムが行われた。

(注3) 「駒繫神社」は世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁

目に鎮座まします古社で、昔から付近

一帯の鎮守様として尊崇されている。

御祭神は大國主命、又の名を子の神、

子の明神とも言い、五穀豊饒の神であるとともに、源氏ゆかりの武運の神

もある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が

奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に

際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繫いだという故

事に由来する(詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号4頁以下参照。なお、樹齢400年以上と言

われた境内の「駒繫の松」(三代目)の大木は、すっかり松食い虫に侵食さ

れて枯死したため、昨年伐採され、現在、四代目の若木を生育中とのことである)。

(注4) 世田谷山観音寺境内の蓮池の中に立ち給う「観世音菩薩立像」は、

法隆寺夢殿の「夢違い観音像」を模して拡大鑄造された菩薩像で、その胎内

にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊簿の写しが納

められている。夢違い観音とは、悪い夢(二度と経験したくないこと、思い出さたくないことなど)を良い夢に変えて下さる観音様と信仰されている。

(陸士61期・飯田正能記)

スイス国営テレビ局東京特派員による元特攻隊長のインタビュー

前記のように、平成26年9月23日、

第63回特攻平和観音年次法要の当日、

12時から13時30分まで、世田谷山観音

寺境内の客殿「旧小田原代官屋敷」に

おいて、スイス国営放送テレビ局(R

TS)東京特派員ジョージ・バウムガ

ルトナー(Georges Baumgartner)フ

ランス系スイス人)氏と同国営放送

のスタッフ(カメラマン・ジェフ・クツ

ク(Jeff Cooke)アメリカ人)氏、ア

シスタント・通訳高橋慶子氏)による

当頭彰会会員堀山久生元陸軍航空特別

攻撃隊第194振武隊長(陸士57期・

陸軍中尉・大正12年(1923年)生

まれ91歳)に対するインタビューが行

われ、求めにより筆者もこれに立ち

会った。その後、同国営放送スタッフ

一同は、年次法要についても、熱心に

取材をしていった。

先に、公益社団法人日本外国特派員協会を通じて、当頭彰会事務局宛に依

頼のあった取材内容は、前記の取材者により、特攻隊に所属された方から直接話を伺いたい、インタビューの中で、属した経験をを通じて感じたこと、また、

教訓として感じていることなどについてお尋ねしたい、当時の写真などがあれば拜見させていただきたい、相当の

高齢の方だと思われるので、お体に負担を掛けまいよう、ご自宅又は近辺まで

出向いて行いたい、短い時間でも結構、とのことであった。事務局の照会

に対し、筆者は当頭彰会が実施し、会報『特攻』に掲載した「特攻インタ

ビュー」記事との関係や古くから交流のある堀山久生先輩を推薦したところ、

御本人も承諾され、筆者にも立ち会うよう求められた。早速先方の取材

日時は、9月24日の午後、1時間程度

でよいから、御自宅に伺いたいとの申し入れであったが、当方の都合が悪く、

いっそのこと、前日23日の年次法要に

は、堀山先輩も筆者も参列するので、

法要に先立ち12時頃から実施してはと

いうことを申し入れたところ、先方も

結構ということ、急遽、世田谷山観

音寺でのインタビューが実現した。

かくして当日の12時前、堀山先輩と

落ち合い、旧小田原代官屋敷の応接間

で待っていたところ、程なく取材ス

スタッフも定時に来訪された。当日は、先方の希望どおり、出来る限り多くの資料等を持参した。筆者は、堀山先輩のインタビュー記事を掲載した『特攻』誌(第89号・平成23年11月発行)及びそれを基に編纂刊行されたハート出版(株)発行の『特攻 最後のインタビュー』誌を始め、堀山先輩が特攻隊を編成した首都防衛用の「成増陸軍飛行場」と飛行第47戦隊に関する記事(帝都防衛の空に散った成増・陸軍飛行第47戦隊の勇士達)を掲載した『特攻』誌(第95号・平成25年5月号)、堀山先輩の編集・著作に係る『館林の空』(平成14年4月29日発行・私家版)等、それに念の為、仏語会話用辞書(ただし、これは必要でなかった。通訳の高橋さんは、英仏両語に堪能であった。)まで持参した。堀山先輩は、貴重な写真集、特攻隊長記事、その他の関係資料のほか、さすがは陸士出身の元特攻隊長らしく、次のようなメモまで持参された。

「陸士57期・陸軍中尉・戦闘・1944振武隊長・四式戦闘機・群馬県館林・堀山久生述「日本の特攻について」
①1923年生まれ、陸軍主計中佐の次男、家系は「武士」、1944年4月陸軍士官学校卒業、明野陸軍飛行学校を経て、1945年5月22日特攻隊

長任命(22歳)、本土決戦用四式戦闘機6機編成、群馬県館林飛行場で19隊122名が集合訓練中8月15日終戦、9月復員、戦後1946年慶應義塾大学法学部法律学科入学、1949年卒業、三井化学入社、現在同社OB、91歳
②特攻回顧・・・

③日本で最初に飛行した徳川好敏工兵大尉は、フランスで飛行術を習得し、代々木練兵場で、モリス・ファルマン機で初飛行を、明治45年に行い、その功績で後に男爵・陸軍中将に昇進された。第一次世界大戦終了後、フランスからポール大佐以下が来日され、所沢飛行場で指導された。海軍はイギリスから霞ヶ浦で、同様教えられた。

④当時、太平洋の戦場で米軍に押され、レイテ島、沖縄で苦戦に至り、戦勢挽回のため70年前の1944年10月25日、海軍の「神風特別攻撃隊」の関海軍大尉以下が米機動部隊に突入して戦果を挙げ、これに続き陸海軍の若者約5千人が特攻攻撃に散華した。

⑤「雲の彼方」の、日本海軍の大学で予備少尉の「遺書」と、ロマン・ユゴー氏の精密な「ゼロ戦」の「精密描写」を見て欲しい。数年前、フランス大使館の紹介で面接し、私の「四式戦」の模型による、その「デッサン」を頂いた。これもお見せする。

⑥飛行時間150時間にて、戦闘機操縦者としては、標準の500時間に対して不足。特攻を志願。陸士出身の将校は、武士の承継者で、青年将校の中心、困難な任務に率先参加が伝統。

⑦目標は、海軍は敵艦艇で、陸軍は敵軍隊輸送船に、超低空水平攻撃、体当たり突入で、訓練は、館林飛行場の北の高度20米の松林を越え、更に10乃至15米に下げ、時速550乃至580キロメートルで、飛行場を南に突っ切った。

⑧目標突入時、高速による揚力発生により、機首が上がるのは、四式戦で初めて機上操作のトリムタブが付き、これで機首押さえが楽になった。それまでは地上整備員が補正した。

⑨陸士の同期生に、沖縄で散った高島俊三君がいる。彼は遺書に「若い部下を殺してしまう罪を、隊員の御両親にお詫びをしてくれ」と、父上に言い残した。私は遺書を書かずに終わった。そこまでの「心遣い」はなく、恥ずかしい。彼が特攻に任命したのではなく、上層部がその編成を決めたのだが、それでも「謝罪」して逝った心の優しさが尊い。

⑩特攻の思い出は、「母の愛情」である。いきなり居なくなつて心配させないために、外出の都度「お母さん、来週も帰ってくるから、この靴下を洗ってお

いて」と頼んだが、母は洗濯しながら泣いたという。陸軍将校夫人でもこうなのだから、一般家庭の母親は、どれ程辛かったらうか、当時貧乏な日本で、息子を大学にまで行かせられる家は少なかった。それが、祖国の戦局が日に日に負けてくる時、予備士官として、お国のためとは言いながら、爆弾諸共五体ばらばらに散つて逝く任務を、母ならどれ程悲しく思ったらうか、それでもお国のためと耐えた、日本の当時の母親に感謝なしにはおられない。息子を、「救国の武士の母」として耐えたのであった。

⑪独身者は、死をまだ気軽に決められませんが、妻子や恋人のあった隊長は、人の情に心中泣いたらう。沖縄特攻の藤井一大尉の夫人は、幼い女の子の手首を結んで、埼玉県の荒川に共に身を投げ、御主人の後顧の憂いを断ち、励まされた。教官だった大尉の少年飛行兵の生徒には、学校では黙って言われなかったと聞く。西洋人はこれをどう思うか?聞きたい。

⑫1970年、私は米国シカゴ市のリキッド・カービニック社と三井化学とで二酸化炭素とドライアイスの合弁会社を作る、その営業責任者として渡米した。ハドソン川のカムデンに海軍の大軍港があり、4万5千トンクラスの大型



インタビュー中



写真その他の資料説明・撮影



記念写真・右よりG. バウムガルトナー特派員、堀山氏、高橋通訳、J. クックカメラマン、筆者(飯田)



旧小田原代官屋敷と特攻勇士之像

型戦艦をオフイサークラブから見た時は、当時まだ46歳、流石に「己れ！」と血が騒いだが、「とても沈められないなあ」と素直に思った。突っ込んだ特攻隊員達は、その瞬間どう思ったのだろうか？

⑬また、数年後合併会社の成功を祝うパーティーで、先方の副社長は、海軍の青年将校だったようで、「私は空母サラトガで硫黄島攻撃に参加したが、若し堀山さんの「特攻機」が体当たりしてきたら、二人共この世に無く、今日の日は無かった。それがなくて済み、お互いに協力の成果をここに祝えて、こんなに喜ばしいことはない」と言った。硫黄島戦当時、海軍の特攻、第二御楯隊の6機が空母サラトガに命中。飛

行甲板はめぐり上がり、搭載の飛行機は着艦出来ず、作戦から外されて米国に回航を余儀なくされ、以後戦列に復帰することはなかった。サラトガとレキシントンには、当時3万5千トンの世界最大の空母で、レキシントンは日本海軍の潜水艦が撃沈している。⑭もうこれで昔話はいいだらう。当時陸士57期の特攻は、操縦者は約800人中、123人が突入、120人は終戦で生き残り、現在は24人が未だ生存している。

⑮第二次世界大戦の一番過酷な任務を志願した自分を、武士の後継者と誇りに思っている。しかし、人間として如何に幸福を求めて生きるかという、一般の人生から見たら、「哀れ」とも言

えよう。しかし、そのような時にまた巡り合っても、やはりこのように振る舞いたい。以上」

インタビューは、ほぼ以上のメモに沿って行われた。先方の取材内容(尋ねたいこと)もほぼ同様なものであったからだ。持参提供した写真や資料等を興味深く撮影していたし、熱心にかつ、真剣に聴取していた。当方も可能なものはすべて提供し、後日翻訳して精読したいとのことであった。

予定の1時間を30分以上超過し、終わりの頃はお互いに打ち解けて話が弾んだ。カメラマンのジェフ・クック氏の父親も一昨年90歳で亡くなったが、戦時中は米軍のB-24重爆撃機の偵察員だったとのことであった。そして、

スタッフは、いづれまた堀山氏宅を訪問して、貴重な多くの資料を拝見したい、とも言っていた。

なお、スイス国営放送での放送予定番組は、夕方定時のニュース番組 Journal 中での放送(日本で言えば、NHKのニュース番組中での枠と同様のもの)で、放送圏は、スイスのフランス語圏及びカナダ、ベルギーなどのことである。

その後、スタッフは、引き続き年次法要を興味深く熱心に取材、撮影などし、筆者にも色々質問していたが、特に神仏習合の祭典には興味を示していた。真の特攻の意義、日本人の特攻精神がヨーロッパやカナダ等で正しく伝えられることを願っていた。今後はむしろ、日本から積極的に発信するよう努力すべきであろう。

(陸士61期・飯田正能記)

全日本空挺同志会高野山慰霊祭に参列して

副理事長 藤田 幸生

私は、海自出身の（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「特攻慰霊顕彰会」という）の役員である。希望して初めて高野山の空挺同志会慰霊祭に参列させていただいた。感じたこと、学んだことが多かった。

今まで、義烈空挺隊の慰霊祭には、沖繩の読谷飛行場、摩文仁の丘に参列したことがある。熊本健康軍と宮崎の川南、和歌山の高野山でも斎行されているとお伺いし、参列したくて機会を狙っていたところ、今回その機会を得た。

平成26年度（第59回）高野山慰霊祭



は、9月7日（日）9時30分～11時30分の間、高野山奥の院「空」の碑の前で、不動院御住職のお導きにより執り行われた。主な参列者は、主催した空挺同志会の衣笠会長（当「特攻慰霊顕彰会」専務理事）以下全国の支部会長等の会員、現役陸自第1空挺団員、西村和歌山県地方協力本部長、信太山37連隊長代理、片山東大阪隊友会会長、濱野関西防衛を支える会会長、川村空挺靖國奉賛会会長等の皆様であった。特攻慰霊顕彰会からは、倉形寛会員と藤田の2名が参列した。行動は、前日6日から移動して高野山不動院に泊まり、6日、7日に行われた全ての行事に参加した。

6日は、高野山見学ツアー、遺族を囲む夕食会、同志会懇親会があった。高野山ツアーは、案内人の説明を受けつつ、奥の院参道を進み、院の地下のお堂まで参拝した。途中墓碑、史蹟群の中にある歴史上の人物の名前を聴くにつけ、空挺部隊が、この地に「空」の碑を建て得たことの意義の大きさに感動させられた。しかも、碑は、参拝者総員が通る場所に面し、慰霊祭を営むに適した広い場所も確保されている。英霊の皆様も喜んでおられることであろう。

以後の夕食会、懇親会は、年に一度の仲間との出合いであると同時に、新しく合祀された陸自の空挺部隊関係者のご家族が加わり、しめやかな中にも、和気藹々とした雰囲気を実施された。久しぶりに、気持ちの通い合う良い会に出会った。

そこで分かったことであるが、この「空」の墓碑には、旧陸軍の空挺隊員のみではなく、戦後の自衛隊空挺隊員の御霊も合祀されているということである。このような例を、私は今まで知らなかった。したがって、この慰霊祭は、特攻隊員の慰霊祭というよりは、旧陸軍と陸自の空挺隊員全体の慰霊祭であるということである。その意味においては、「落下傘の絆」で結ばれた御霊の慰霊祭ということである。

翌7日（日）の朝は、昨夜の雨が少し残っていて雨模様であった。6時に不動院本堂で、朝のお勤めがあり、新しいご遺族始め、宿泊した関係者は、総員参

拝した。清々しい気持ちに洗われた。不動院は、私達だけの貸切状態であった。参列した現役隊員達は、前日に提灯

を張り巡らせ、慰霊祭の現場には、早朝からテントを張り、お供え物、供花の飾り付け、焼香の準備と、準備万端整えていた。また、その他の隊員は、高野山の域内を駆け足で巡拝する等して、心身の鍛錬にも努めていた。「さすが空挺部隊だ」との感を強くした。

9時10分、不動院前から慰霊行進を開始した。誘導員を先頭に、陸自第3師団音楽隊、国旗、御遺族、空挺同志会会長以下全国の参加者、来賓、一般参加者の順に並び、君が代行進曲の演奏に合わせて、一の橋「空」の碑前までの約400メートルを、参道に沿って行進した。沿道には、参拝客や宿坊の人達が群がって、約200メートルの行列を珍しそうに見送ってくれていた。毎年のことらしい。静かな域内に音楽隊の行進曲が、誇らしそうに響き渡っていた。指定されたテント内の折椅子に着席した。9時30分、慰霊祭が始まった。

献灯から始まり、国旗掲揚、国歌斉唱、黙祷、御導師入場、新合祀者紹介、遺骨安置、読経、祭文奏上、追悼の辞、献詠、納骨、読経、焼香、御導師退場、新合祀御遺族挨拶、「空の神兵」合唱、国旗降下、閉会と、全てが空挺部隊らし

大分縣護國神社 「特攻勇士之像」竣工奉告 祭及び除幕式に参列して

副理事長 藤田 幸生

平成26年9月28日、大分縣護國神社において、「特攻勇士之像」竣工奉告祭及び除幕式が斎行された。ご案内を受け、この祭式に、当（公財）特攻隊戦没者慰靈顕彰会（以下「当会」という。）の代表として参列した。千葉・館山からの空路日帰りの一人旅であった。私にとって、大分は初めての訪問であり、現地に、知人は誰もいなかった。

「特攻勇士之像」を、全国の護國神社に建立するという事業は、当会の継続事業であり、像の奉納も今回の大分縣護國神社が14番目、九州では、鹿児島、福岡県の各護國神社に次いで、3番目である。

今回の大分縣護國神社での建立に当

く、規律正しく、齊々と執り行われた。旧陸軍関係者と自衛隊の現役、OBが一体となった、見事な慰靈祭であった。これからの慰靈祭の一つの理想的な形を見る思いがした。広めていけたらと思う。焼香の最中に、側の沿道を、托鉢帰りの修行僧の一人数十人が、奥の院

に向かつて黙々と通り過ぎて行った。式典終了後、不動院に帰って昼食を摂り、高野山を後にした。新大阪経由で千葉館山まで、その日のうちに帰宅できた。

陸海軍とも、各地で各種の戦没者の慰靈を執り行ってきた。しかし、各慰

たつては、大分偕行会を通じてお願いし、また、靖國神社から当護國神社への働き掛けを通じて、多くの皆様のご理解とご協力、ご支援を得ました。皆様のご尽力に対し、心からの敬意を表するとともに、感謝の気持ちでいっぱいであった。特に、大分県特攻勇士之像建設実行委員会の会長をお引き受けいただいた、大分商工会議所会頭の姫野清高様を始めとする各役員の皆様には、厚く御礼申し上げます。また、大分偕行会の安藤 幹様、小俣 健様ほか会員の皆様、大分県海交会、大分県隊友会の皆様、更には、100万円という高額のご寄附を賜りました長尾昭二様ほかの皆様へ感謝申し上げます。

大分縣護國神社は、市のほぼ中心にある小高い山の上に佇んでいた。JR大分駅から、タクシーで10分程度の距離で、麓からの車道に入ると、静かで落ち着いた雰囲気であった。境内も広く社殿の手入れも行き届いており、気持

靈祭とも、関係者の高齢化によって、催行できなくなってきたのが現在の状況である。このことに鑑み、今回の高野山における、空挺同志会による落下傘を絆とする慰靈祭は、今後の戦没者慰靈祭のあるべき姿を表しているのではないかと感じた次第である。

ちが落ち着いてくる素晴らしい神社であった。鳥居をくぐって境内に入ると、正面に拝殿、そのすぐ右手の良い場所に像が建てられ、除幕の準備ができていた。陸上自衛隊の音楽隊が参加して、華を添えてくれていた。

14時から、神社拝殿において、竣工奉告祭が始まった。小野宮司による祝詞奏上、姫野会長の玉串拝礼に続いて、私は当会を代表して指名拝礼した。その他参列者は、大分県出身の特攻戦没者120柱の御遺族代表の皆様、国会、県議会、市議会の各議員の皆様、自衛隊大分地方協力本部長他、現役自衛官代表、商工会議所、戦没者遺族会、旧陸海軍関係者、自衛隊関係団体の代表者、一般市民有志の皆様など、1000名余りであった。

拝殿での祭式終了後、一同除幕式の場に移動した。陸上自衛隊音楽隊の奏でる音楽に導かれて、除幕式が始まった。姫野会長、小野宮司、他2名

この慰靈祭は、我が国に空挺部隊がある限り、永遠に続けられていくことであろう。

の代表の方が前に出て除幕の綱を手にした。その綱を引くと、白布に覆われていた、台座の上に力強く立つ特攻勇士之像と見事な黒い御影石の副碑が出現した。秋の午後の強い日差しに照らされて、光り輝いていた。参会者一同から、思わず「おおっ」という感動の声が起った。特攻勇士之像は威厳を持っていた。感動的な一瞬であった。ひと時過ぎると、一同、像の前で、譲り合って交代で写真を撮っていた。そして、副碑の文言や、副碑の裏側に刻まれた120柱（陸軍52柱、海軍68柱）の英霊のお名前を確認するなどして、ひと時を過ごしていた。

その「副碑」に刻まれている言葉を紹介しておきたい。

「特攻 特別攻撃隊

特別という意味に日本人なら心を動かされずにはいられない
大東亜戦争の戦局に起死回生の一撃を加えんと数多の若人が必死の戦法



除幕式



「特攻勇士之像」と副碑



副碑の刻文



碑前にて姫野会長(右)と筆者(左)

に赴いた
空に 海に 陸に 往きて還らぬ旅
路に就いた

大切な人々にふるさとの野山に訣別
しその多くは妻を娶ることもなく
千々に乱れる心をまとめ 従容とし
て悠久の大義に生きる運命を受け入
れたのだ
ただただ祖国の安泰のために
像は問う

いまを生きる日本人よ
俺たちのうるわしい国 日本は
護られたのかと
大和民族の誇りは失われていな

いかと

目覚めよ 日本人

ますらをの かなしきいのちつみか
さね つみかさねまもる やまとし
まねを

三井甲之

最後に場所を像の向かい側の儀式殿
に移して、15時から直会が行われた。

席上、姫野会長から護國神社の小野
宮司へ感謝状が授与された。私の席の
近くには、大分商工会議所の最高顧問
である安藤昭三様、内閣総理大臣補佐
官の蟻崎陽輔参議院議員や、衆議院議
員衛藤征士郎夫人の衛藤まり子様がお
られた。それぞれが挨拶に立たれた。
中でも、衛藤まり子夫人が、知人の佐
野昌子様から託されて紹介された言葉
は、この場に相応しい感動的なもので
あった。日帰りの旅の疲れも吹き飛ん
でしまった。

最後に、その言葉を紹介して、この
稿を終わりたい。

「私は 当年85歳の老婆でございます

昭和20年終戦の年の春 16歳の女学
生だった私は「大分第十二海軍航空工
廠」に学徒動員で出勤し 軍用機の修
理に携わっていました

航空工廠は 舞鶴橋を渡ってすぐ
現在の岩田町一帯の広大な敷地です
海に向かって地続きには 海軍航空
隊の基地があり 修理の仕上がった飛
行機をそこまで押していくのも 我々
学徒の役目でした

そして 特攻隊の見送りも!

その頃はもう 敵の空襲が頻繁で
基地のあちこちに時限爆弾が落とされ
ており 側をとるときは 一つ破裂
するかと生きた心地もなく 抜き足さ
し足で歩き 通り過ぎた途端 必死で
走ったことを思い出します

特攻機を見送る場所は決まっており
私達数十人はひと固まりになって 白
いハンカチを振りながら見送るので
離陸した機は 一度私共の頭上まで

引き返し 二、三回旋回しながら別れ
を告げます

風防を開けた兵士は 首に巻いた白
いマフラーをなびかせ 私達はそれに
向かって懸命にハンカチを振り続けま
す ワア ワア 泣きながら・・・

そして機は 南に向かって飛び去る
のですが その際 左右の翼を 上下
に何度も何度も振ってくれます それ
が「サヨナラ」の合図なのです

69年経った今も その時の光景は
脳裏に焼きついて離れません

この度「特攻勇士之像」ご建立の由
ご関係の皆様にご感謝と敬意を表
し上げます

英霊の皆様が どんなに喜んでおら
れることかと

今日も 改めて空を見上げていると
ころでございます

平成二十六年九月

佐野昌子



人の精神を堅持しておられる方である。

「編注・本稿は、平成25年（2013年）1月15日付けの「台湾協会報」に掲載された講演会記事で、去る9月23日の世田谷山観音寺における特攻平和観音年次法要の直会の席で、ご一緒した際、お持ち頂いたものである。

講演会
強運な台湾人青春
 講師 呉 正 男氏
 信用組合「横浜華銀」前理事長
 日本李登輝友の会理事
 横浜台湾同郷会最高顧問等

氏は昭和2年（1927年）台湾斗

六街（現在の斗六市）生まれ、横浜市在住、法制大学経済学部卒、横浜華銀勤務、平成九年（1997年）退職、

とあるが、氏は斗六尋常高等小学校卒業後、昭和16年4月、留学のため来日し、旧制中学3年の時に陸軍特別幹部候補生を志願し、昭和19年4月、水戸

航空通信学校に入隊、機上通信士養成中隊に配属、昭和19年12月下旬、繰上げ卒業をして茨城県西筑波飛行場の滑

空飛行第一戦隊に配属となり、昭和20年5月、朝鮮半島北部の宣徳飛行場に移動、滑空挺進隊の特訓中に終戦となり、ソ連に抑留され、中央アジア・カ

ザフスタンの収容所で2年間の強制労働に服し、昭和22年7月、舞鶴港に上陸、復員後も日本に留まって復学し、

昭和29年に法制大学を卒業、という辛酸をなめた経歴の持ち主である。

氏の体験を綴った『塞翁が馬』のわが青春」と題する論稿（日台友好の友愛会会報「友愛」掲載）は、既に当

顕彰会の会報「特攻」第88号（平成23年8月号）に掲載しており、重複する部分もあるが、貴重な体験談として、

また、日台友好の証しとして掲載するものである。」

はじめに

齋藤理事長よりご紹介頂きました呉

でございます。

私がこうやってこの会に呼ばれてお話し出来るのも、旧軍隊を経験した方達は皆、90歳前後になつていても拘

わらず、私はまだ85歳で、同年配の旧軍関係者は非常に少ない、こうして元

気に皆さんの前が上がれるので、希少価値として選ばれたのではないかと思います。

私は永年台湾協会の会員で、いろんな投稿をしておりますので、ある程度ご存じの方がいらっしゃるのではない

かと思えます。最近ではNHKのど自慢台湾開催現の署名運動の会長として何回か投稿

したり、台湾人に対する戦後補償についても投稿しております。

齋藤さんから依頼があつた時に、軽くOKしてしまつたのですが、後で考

えてみたら、台湾の政治情勢とか、日台友好とか、そういう高所からの話ではなしに、私個人の話ですので、果た

して人が集まるのか非常に心配しました。私は非常に運が良かった、私のいろんなマイナスが幸いして今日の私が

あるので、「強運な台湾人青春」を演題にしました。

しております。

また、関東のお伊勢さんと言われております伊勢山皇大神宮という横浜・桜木町そばにあり、神職が約25人もお

られる大きな神社の総代に任命されたのは、私だけと大変光栄に思っております。私が今日健在なのは、神仏のお

陰だと信じている次第です。前置きが長くなりましたが、慢談調になるかと思えますけど、少し時間を

残しまして、皆さんの質問を頂きたいと思えます。

内地留学

昭和16年4月に、内地に留学しました。留学は、今は大学ですが、あの頃は中学でも留学なんです。

私は、斗六尋常高等小学校という日本人学校に入ったんです。同級生が約30人の小さな学校ですが、台湾人の共

学生は、私のクラスには6人もおりました。

小学校6年卒で嘉義中学を受けて落ちました。高等科1年で受けてまた落ちました。高等科2年を卒業したら、

3度目の嘉義中学受験かなと思つていましたら、親父が日本に行けというこ

とになりました。あの頃は、船の切符さえ買えば内地へ来れたのです。

中学受験2回不合格となった結果、

内地留学でした。

志願入隊

昭和19年の4月に、陸軍特別幹部候補生を志願して入隊しました。

昭和16年12月が大東亜戦争開始で、17年頃は良かったんですが、18年になると、もう敗色が濃くなって、あっちこっちで玉砕、転進、転進というのは本当は退却なんですね。日本の国家が危ないという時代になりました。

実は私、斗六小学校で4年、5年、6年、高等科1年と4年間剣道をやっていました。中学2年の時には、講道館で剣道初段を取ったぐらいだから、私は、言うなれば硬派だったのです。そういう関係で活発な愛国少年になってしまったのです。

昭和18年の夏頃親父に、志願入隊したいという手紙を出したんですけれど、なかなか返事が来なかつたのです。私は郵便為替で毎月学費を送って貰っていたんです。親父に、親父の許可を得ずに入隊する、今後学費を送ってくれなくてよい、新聞配達をやるからと書いたのです。すぐ親父から電報が来ました。お前の信念どおりにやれ、と。

あの頃の少年は、どうせ戦争に行くなら飛行機に乗った方がよいと、みんな航空隊を志願するんですね。

新設の特別幹部候補生を志願して、

陸軍水戸航空通信学校に、昭和19年4月、入隊しました。

入隊した時には、12個中隊あるうちのある中隊に入りましたら、何人かが呼び出されて、更に試験を受けて空中勤務者の中隊に入ったんです。1個中隊だけが、機上通信士養成の中隊でした。対空通信、気象通信とか、あるいは飛行場同士の通信とかを航空通信と言うのです。

皆が希望している中隊に入ったので羨ましがられましたが、要するに飛行機乗りは消耗品なんです。あの頃の運動競技は、棒倒しとか、騎馬戦とか、あらゆることを他の中隊に負けないように訓練を受けました。

特別幹部候補生というのは、海軍の子科練と同じなんです。幹部候補生という、皆さん直に将校と思うんですけど、下士官養成のクラスなんです。

滑空飛行戦隊配属

4月入隊で、翌年3月が卒業なんですけど、戦局が非常に厳しいので、昭和19年12月末転属命令が出て、西筑波飛行場の滑空飛行第一戦隊に配属されました。

着いたその戦隊は、南方に出撃する直前でした。私は搭乗機を指定され、夏服に着替えさせられました。私物、郵便貯金や、必要な遺書や遺髪、爪

なども全部家族に送れという非常に切迫した状態だったのです。

私はこの部隊がどんな部隊かよく判らなかつたが、空挺隊でした。ただ、あつたのは、重爆撃機と大きなグラライダーでした。

そのグラライダーに乗る兵隊が、滑空兵というのですが、グラライダーから飛び出して敵の飛行場を攪乱させる挺身兵士です。グラライダーには約20何人かの武装兵が乗れます。滑空歩兵聯隊が既に出発していて兵舎が空っぽだったんです。九七式重爆撃機と「クーハ」という大型滑空機が発する予定だったんです。ところがなかなかスタートしなかつた。実は、その滑空歩兵が乗船していた航空母艦が上海沖で12月19日に沈没したので、滑空部隊の出発が中止になりました。

飛行機がグラライダーを120メートルのロープで曳行する。九七式重爆撃機というのは紀元2597年ですから昭和12年の重爆撃機です。曳行中を見たら、グラライダーの方が九七重より大きいのです。

北朝鮮に移動

滑空歩兵が全滅したので、新規に訓練をしようとして、昭和20年に入りますと、B-29の空襲が激しくなります。B-29は、筑波山のそばにあ

る西筑波飛行場には爆弾は落とさず、全部東京に落とすのです。空襲警報が発令されると、松林の中に隠れるのです。訓練にならないので、結局昭和20年の5月末に朝鮮北部日本海に面した宣徳飛行場に移りました。この宣徳飛行場は、北朝鮮にまだあります。

戦局は、4月には沖繩に敵が上陸しておりますので、今度は沖繩に出撃を予測し、主に夜間訓練でした。夜間の離着陸です。九七重がグラライダーを曳行して上空でグラライダーを離して、グラライダーが着陸する前に、曳行ロープを飛行場に落としてから着陸する、そういうことを連夜繰り返しております。夜間飛行訓練中、着陸する重爆撃機の翼に当たって10人ぐらいが死亡した事故もありました。

滑空戦隊は、飛行機がグラライダーを曳行中の速度が、時速180キロなんです。今の新幹線の半分近い速度しか出せなかつたのです。

我が戦隊は、なかなか出撃の機会がなかつたのです。

九七重で着陸したのが義烈空挺隊だったのです。この空挺隊を私達の飛行場で見えています。

昭和20年5月25日、沖繩に向け九七重に11人か12人かが乗り、12機出撃して、1機だけ沖繩の北飛行場に着陸し

て、飛行場を荒らしまわったという記録があります。即ち、12分の1の成功率です。

特攻隊の選に漏れる

温存されていた我が滑空戦隊が、地上戦闘終了後の沖繩に出撃することになり、空中勤務者全員は7月初旬頃、飛行場の中にある神社に集められ、紙切れを渡されて、特攻志願の意識調査がありました。その紙に三つ書いてありました。志望、熱望、熱烈望。この三つに丸を付ける、と。これでもう命が決まる、順番が来たなど私は熱烈望に丸を付けました。それですぐ特攻要員が決定したんです。飛行機の方は、正操縦士と副操縦士、そして機上機関士、通信士、射手、航法士の6人。グライダーの方は、正操縦士と副操縦士の2人です。私達の滑空戦隊は、8人が8機で64人が特攻要員です。優秀な者ばかりが選ばれたんですね。私は通信技能が良くなかったせいかな、選ばれませんでした。

神龍特別攻撃隊桜空挺隊として出撃した人達は、絶対に戻ってこない、と見送りました。ところが、出発したのが何と8月5日なんです。終戦の10日前なんです。死ぬと思っ行ってた人達は、東京の立川飛行場の近くの福生飛行場で終戦になって、すぐ帰宅しまし

た。生き残れたと思っ手を振った私達が、ソ連に抑留されたり、あるいは、38度線を越えて南朝鮮に脱出するの、色々苦労がありました。

終戦・抑留される

終戦の時には、北朝鮮にいて、ソ連に抑留されました。この抑留そのものは、私個人から見れば非常に幸せだったんです。もし入隊していなければ、東京大空襲に遭っていただろうし、筑波飛行場にいたら、焼野が原の東京から台湾に帰ったんじゃないかと思いません。ソ連に抑留されたので、台湾に帰れなかった。私が今日あるのも、結論的に言ったら、一番幸せだった抑留だと思っんです。

終戦になり、残った留守部隊の隊長が、終戦前に受けた命令に従い、戦後の16日に北へ向かったんですけど、不穏な空気を察し、平壤飛行場に8月20日に入りました。次の命令待ちということでした。

飛行場の端っこの大同江で水泳をして遊んでおりました。25日にソ連の飛行機が着陸し、これは危ないなどということになり、南方の38度線をしようとして、退散することになりました。退散する時には、色々航空糧食があり、内地に帰れば非常に高く売れると思っ持って出発しました。やはりそれを

捨てて、途中で軍服を脱いで朝鮮服に着替えました。

偶々3人で山中を歩いていて下を見たら、鉄道があつたので、線路の上を歩いていると、北の方から避難民列車が来たんです。止まって、乗れと言っのです。避難民には女性、老人、子供が多かつたんです。

新幕駅でその列車が止まって、陸軍の大尉とソ連兵が、男性は降りろ、と言っので、私の仲間3人とその他約50人が降りました。降りない人もいたんですが、検査はありませんでした。元軍人であつた者は一歩前へ出ると言われしました。私は未だ満18歳になつたばかりでしたから、民間人と言っても通るのに前へ出ました。私と衛生伍長の2人を含め、20人ばかりの元軍人を、南朝鮮の米軍に渡すよりも、ソ連の方で日本海側から帰すんだらうと思っ、ソ連兵2人と元日本兵20人が38度線の北側を東へ向かつて1週間、野宿しながら歩きました。

面白いことに、元日本兵が20人もいるんですから、ソ連兵2人ぐらいひねるのはそう難しくないんじゃないか、という話も出るんですね。途中から飛び込んでくる兵隊もいるんですね。一般人では、朝鮮人から迫害を受ける恐れがあり、このグループに入った方が

安全だと。あるいは飛び出ししていなくなつたと思つたらまた戻ってくるのがいたり、これならソ連兵の2人を殺害して逃走しない方がいいんじゃないかなどという話をしながら歩いたのを覚えています。結局元山まで、1週間ばかりで朝鮮半島の西から東まで歩いたんです。

そこから貨車に乗り、北上して興南という港で下車しました。興南は、私が元いた宣徳飛行場のすぐそばなんです。つい1カ月前までは、この港の上を飛んでいたんですね。それが1カ月後には抑留者となつてこの港に着いたということでした。

昭和20年10月、興南港から日本へ向かうんだと思っ乗船したが、北へ向かうんです。ウラジオストックの南のボセツト湾、そしてウラジオストックから日本内地へ行く船に乗るんだと、そういう希望をまた持つものなんです。

カザフスタンへ

ところが、船ではなく、貨車に乗つたんです。荷物を積み貨車ですね。真ん中に扉があり、左右に柵があつて、上下に10人ずつ、1貨車に40人ぐらいです。そして扉を閉めます。竹筒が1本出ているからオシッコはできるんですが、大便はできなくて、汽車が途中で石炭や水を補充するために停車する時に、線

路に降りて用を足すのです。私達の列車だけでなく、前の列車の者も同じ場所です。糞だらけでした。

西へ西へと向かって、23日間も乗ったんです。これではヨーロッパに着いてしまふんじゃないかと思つていたんですが、どこまで連行されるのか、前途は不安でした。

收容所の生活

着いた所が中央アジア・カザフスタンのゲジルオルダ收容所でした。カザフスタンは大きく、私がいた所は、遙か西の方です。黒海の東にカスピ海があつて、その東にアラル海があり、その南側に私達の收容所がありました。半砂漠で、小さな草木がありました。ラクダも通つていました。私は車中でマラリアを発病しました。マラリアに罹ると、熱が出て震えるんです。あんまり震えが激しかったので、仲間の上に座ってもらつたりしました。

收容所での労働は、3ランクあつたと覚えています。50%、75%、100%と、身体の具合によつて軽い作業、中程度の作業、通常の作業、というように分かれておりまして、それを決めるのは、揮一丁の裸になつて、ソ連軍の女医と日本人の軍医の前に立ち、手を出して爪を見せるんですね。三日月があるかないかで判別するんです。私

はマラリアの発症があり、痩せていたしたので、75%の中間の作業が多かつたのです。抑留中の話は、色んな本などにあるので省略しましょう。

この收容所には、約1600人收容されていまして。200人ずつ入る宿舎が8棟、左右に4棟ずつあつて、真ん中にトイレとか食べる所とかがありました。

そんなに死者は出ませんでした。半砂漠だと青い物がないけれど、牛や馬が食べているのを見ると、これは毒じゃないと判断して、青い物が芽を出すと摘んでポケットに入れて後で食べました。ああいう物が一番生えやすいのは、じめじめした所です。ロバがオシッコをするような所に生えやすいんです。それを採つて食べるものから、随分回虫が湧きました。夜中にはと吐いたら、長いのが二、三メートル先に飛び出しました。あれが口から出ないで上に行つたら脳に行つたと思ふんです。ある時、大便に塊が出たんです。棒で数えてみたら、なんと11匹出たんです。よく腸を回虫に破られなかつたなと思ひます。

カザフスタン收容所の場合は、零下25度になると、仕事をしなくてよいという規定があつたんです。作業に行くため門の所に並んでいると、收容所の私達の生命を守る担当者は、零下25度

になつたから今日は労働させないと主張するが、表の方で働かせるためにいる兵隊のグループは、未だ零下25度になつていないとやり合つていることもありまして。

ソ連の兵隊は、掛け算ができません。5列に並べて5、10、15とやります。何回も何回も数えて何人出て行つて何人帰つて来たか、寒いのに長い間数えているんです。零下25度というのは、やつぱり寒いですよ。私もいくら左の小指が凍傷になつて色が変わったけれども、凍傷というのは痛くないですね。でも左の小指は切らずに済みました。

実は、余り抑留時代の話はしたくないんです。嫌な思い出ですからね。私は余りソ連のことを友人や私の家族にも話しません。自分の居た收容所を訪ねようとも思いません。本当に嫌な所でした。

ダモイ日本

昭和22年6月、また列車に23日乗つてウラジオストクに着いたんですけれど、ウラジオストクのソ連兵が、このグループはまだまだ使えるから、ここで使うと言つたんです。カザフスタンから付いて来た兵隊は、それなら連れて帰ると、しきりに喧嘩をしているのです。結局、アイウエオ順に半分ダ

モイということになつて、幸い私は、あの時改姓して大山正男だったので、アイウエオ順で帰れました。若し残留となるなら、私は台湾人だ、と言えは帰してくれるんじゃないかと思ひましたが、私が台湾人だと言つたら、ソ連軍から八路軍に渡されたと思います。

復員して日本在住

舞鶴に7月13日に着いて、14日に復員手続をし、証明書を貰つて外人登録をして住むことができたんです。

ところが、3年後に帰つて来た台湾人で、私が把握している十何人かの台湾人は皆、戦勝国民として送り返すべきだとして、舞鶴から佐世保に送られて收容され、佐世保から上海に送られて、上海から基隆へと、送られて行く先々で皆牢屋に入れられ、2ヵ月半後によくやく帰宅できたのです。国民党は、中国共産党軍と戦争中ですので、ソ連から帰つて来た若者は、やはり簡単にし出しませんよ。

実は、この席に、3年後にソ連から帰つて来られた香川博司さんがおられます。代わりに簡単に説明しますと、香川さんは、佐世保に收容され、いよいよ乗船時に、新しく入つて来た台湾青年が、母親が危篤で早急に帰りたいというところで、香川さんは、自分が乗る船に、代わりに彼を乗せたのです。香川さ

んは、収容所の衛兵に、英語でうまく話して収容所を出たのです。私と同じように非常に幸運な方だと思います。

戦後、台湾の白色テロで政治犯達の苦勞を見ると、皆10年、20年、30年の懲役、あるいは死刑になった。私と同じ年代の人は皆苦勞されたのに、随分私は助かったなあ、とつくづく思います。

どうせ親は、私が死んだと思ってるんだから、一旗揚げてから手紙を出す、そうと思いましたが。下宿のおぼさんの関係で茨城県の方へ行って少し百姓をやったり、麴屋さんで働いたこともありました。これはどう考えても、一旗揚げられないと思いついて、10月頃になって初めて手紙を書きました。「今度は言うことを聞くから指示してくれ」と。

新制高校に入学

ところが、まさかの「勉強しろ」と言われたのです。それは私は全然予想しませんでした。兵隊2年、ソ連に抑留2年、中学を受ける時に1年ダブっているから、5年遅れているんです。新制高校が始まった昭和23年4月に、私は中学3年終了ですので、目黒の不動前の攻玉社高校1年に入りました。あの頃の5歳違いというのは大きいですね。同級生から兄貴と言われました。私も少し馬鹿らしくなり、どうしたら

早く大学に行かれるかと、考えました。

東京華僑総会へ行き、「私は嘉義中学を卒業して入隊し、ソ連抑留から復員した。進学のため卒業証明書が必要であるが入手できない」と相談しました。理由書に保証人2人を付けた書類の提出」を求められたので、台湾人の友人の捺印を貰って提出しました。華僑総会会長の大捺印を貰い、嘉義中学卒業証明書を入手したのです。昔、2回も不合格でしたのに。

当時、旧制中学を出た人は、新制高校夜間部4年にいったら大学受験の資格があったんですね。それで渋谷高校夜間部4年に入学、高校を1年生と4年生の2カ年で、法政大学に入れたわけです。

親父は「勉強しろ、お金は送る」と言ったんです。その時の親父の肩書きは、華南銀行の経理、支店長なんです。だから多分金があったんでしょ。うね。学費はほとんど貰いませんでした。親父は日本に行く人がいると、お金を渡して、横浜にいる息子に渡してくれと頼み、その人は私に会いに来るけど、お金を渡してくれなかったんです。物を買って帰った方が儲かったんでしょ。うね。戦後、台湾に帰った時に親父と一緒にその人をとっちめたことを覚えています。

私はパチンコ屋で働きました。横浜伊勢佐木町3丁目の小さなパチンコ屋です。1罫に玉が入ると1個、2罫に入ると2個、3罫に入ると3個、ホームランは4個出てきて、その玉何個と煙草何本と取り替える時代です。小さなパチンコ屋で私は高校2カ年と大学4カ年、計6カ年働きました。台湾人が経営者だったので、私は直にマネージャーになって、割りに楽な、夜は釘をちよつといじったり、といった仕事をしました。

私は昭和29年3月に大学を卒業しました。台湾人留学生仲間が皆大学を出て、ほとんど失業しているんですね。台湾は、蒋介石の悪い噂が一杯入ってきているけど、新中国の毛沢東の国は素晴らしい国だということで、しかも中国からも「帰って来い」と呼び掛けがあったので、私の仲間はほとんど昭和27年、28年に大陸に渡りました。

私は舞鶴まで、2回も見送りに行つて、昭和29年に卒業したら、私も新中国に行こうと思っていました。中止しました。

5年遅れたことが、非常に運が良かったという事です。

国籍詐称

私はソ連の捕虜になった時に、本籍地は漢字で台湾台南州斗六郡と書いた

のに、ソ連兵は字が読めないから、日本人として取り扱い、私が台湾人と気付かないで、日本へ乗船させてくれたと永く思っていました。

10年くらい前に、捕虜名簿があると10年くらい前に、申請したところ、入手した捕虜名簿は、ウラジオボストの乗船時に作成されたロシア語の文書でした。なんと、私は、国籍日本、本籍茨城県になつていてるんですね。これを若し台湾人と申告したら乗船させてくれなかつたんじゃないかと思いません。

台湾人であると、ソ連軍が気付かなかったと思つていたので、そうじゃなしに、私は日本人と名乗り出たんですね。自分でも不思議に思っています。本日は、私の強運な青春時代について話をしました。中学受験を2回不合格となり、中学3年で志願入隊して機上通信士として参戦し、ソ連に抑留され、国籍を詐称し、5年遅れの復学等々、不運で平坦でない青春でした。その全てが幸運に恵まれた結果になった次第です。

余談

収容所は砂漠地帯ですから、滅多にお風呂に入れません。年に二、三回お風呂があるんですけど、着てるものを全部脱いで熱消毒室に入れます。それから中に入って、木の桶に一杯お湯を



九七重でクー8を曳航 筑波山上空

「クー8」滑空機は97重を曳航機とし、兵員15~20名あるいは山砲、47ミリ対戦車砲、20ミリ高射機関砲、小型自動車等を搭載できた、この頃落下傘部隊は携行できる兵器が制限されるので、空挺部隊の主体は滑空部隊に移りつつあった。欧州における大空挺作戦、例えばノルマンジー空挺作戦など、連合軍空挺部隊の主力は滑空部隊になっていた。我が国に於いても、挺進集団の兵員数は落下傘兵と滑空機搭乗部隊の兵員数とは概ね同数だった。滑空機操縦者は敵地に着陸後基地に戻ることは考えていなかったで、多く養成しておかなければならなかった。滑空飛行戦隊は曳航機である97重の倍数の「クー8」を保有していた。

もらって二人で石鹸を使って体を洗って、もう一杯貰って、二人で体を流して表に出て、熱消毒した衣類を受け取るだけけれど、自分の物とは限らず、誰の物か判らない軍服を受け取るんです。そこで、だんだん消えて行くのがポケットとか袖なんです。分かりますか。トイレの紙がないんですね。砂漠地帯だから葉っぱもありません、木の枝もないんですね。どうやって処分したか覚えておりませんが、ポケットを切っても軍服は軍服、袖を切っても一着は一着なんですね。

の中にカミソリを持った者がいて、陰毛を全部剃るんです。毛虱の関係で。常に帰国の噂があるので、三カ月か、六カ月すると、必ず帰れると思うんですね。帰ったら、こんな体では恥ずかしいと笑い話が出るんです。落ちた所で、何か私に質問があればお受けします。

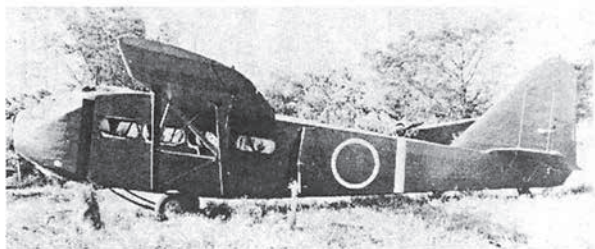
◇

十人の方の広範囲の質問に呉さんは丁寧な答えられて、2時間にわたる講演会は終了しました。

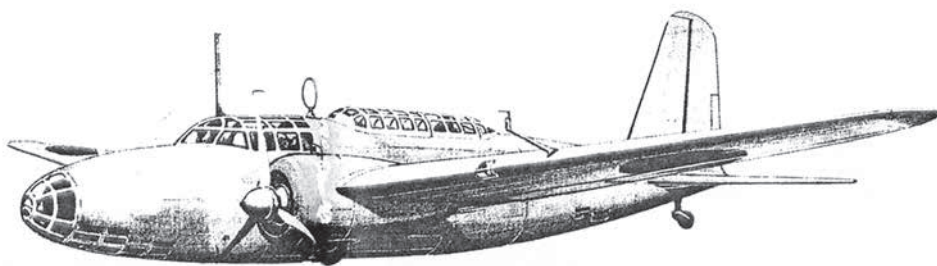
香川さんにも多くの方が個人的に質問されていました。



クー8滑空機



「ク」-8 II型



九七式重爆撃機(キ-21) 1型 陸軍 設計・製作 三菱
 全長:16.00m 全幅:22.50m 全高:4.53m 主翼面積:69.60m²
 乗員:7人 発動機:中島九七式(ハ-5改)空冷式複列星型14気筒950~1080馬力×2
 自重:4691kg 搭載量:2801kg 全備重量:7492kg 最大速度:432km/h
 航続距離:2500km 武装:7.7mm機銃×3~5 爆弾:750~1000kg

陸軍雷撃隊—四式重爆撃機「飛龍」特別攻撃隊・七生神雷隊—

ることとなった。

② 昭和20年2月末、パラワン島のプエルトプリンセサに上陸した連合軍は、その後間もなく同地飛行場の本格的使用を開始し、南支那海及びボルネオ沿岸に襲撃した。

ボルネオ方面4月上旬の来襲総機数201機が、下旬には788機と激増し、タラカン、アビ、ラブアン、ミリ等に対する来襲は特に頻繁で、北部ボルネオ方面に対する敵の上陸企図は次第に濃厚となりつつあった。

4月上旬、前記敵飛行場にはB-24多数を含む約100機が、下旬には約200機が確認されるに至った。

第三航空軍司令官は、この敵を攻撃するに決し、第六十一戦隊の一部を独立第十飛行団に一時配属するとともに、同飛行団長に、プエルトプリンセ

サ飛行場進攻を命じた。

③ 第六十一戦隊の吉谷大尉以下重爆3機は、夜間「タ」弾攻撃の事前訓練を約3日間実施した後、4月28日19時30分頃、チャンギー飛行場を出発、ボルネオのケニンガウ中継基地に23時頃

前進したが、3番機廣瀬少尉機は故障のため残置し、吉谷正之大尉(少候21期)機及び三宅一郎少尉(操候8期)

機(副・高田政二軍曹—少飛8期)の2機をもって進攻した。両機は各々50

kg「タ」弾15発を搭載、29日零時頃同

地を離陸、高度約4kmで航進し、目標前約50km付近から高度2000m以下をもってパラワン島海岸沿いに北上し、高度80mの単縦陣で前方銃を発射しつつプエルトプリンセサ飛行場に突

進、「タ」弾投下とともに全銃座をもって在地B-24に猛射を浴せつつ離脱、洋上に出て直路ミリを指して5時30分頃帰還した。奇襲は成功し、敵機の邀撃はなく、対空砲火も攻撃後、後方から受け、2機とも方向舵等に数発被弾しただけであった。戦果は目視により10カ所以上大炎上で、翌日の戦果偵察の結果、約200機の過半数に損害を与えたと報告あり、4月30日御嘉賞の電報があった。

④ バリクパパンに対する敵機の来襲は、2月以降も依然間欠的に戦爆連合で続けられ、その企図は製油作業及び搬出の妨害及び阻止と考えられていたが、4月下旬にはタラカン上陸作戦関

連航空撃減戦を指向し、6月9日及び13日には戦爆数十機で大挙来襲し、敵艦隊の接近と相俟って同方面に対する上陸作戦の切迫が予想された。

6月19日、第三航空軍司令官は、バリクパパン沖の敵艦船群を攻撃するに決し、左記命令を下達するとともに、第六十一戦隊を第七飛行師団長の指揮

下に入れた。

第三航空軍作戦命令

飛行第六十一戦隊ハ主力ヲ以テ「バリクパパン」沖ニ来襲セル敵機動部隊ヲ攻撃スヘシ

攻撃実施ノ細部ニ就イテハ第七飛行師団長ヲシテ指導セシム(以下略)

第七飛行師団長の指揮下に入れた所
以は、スラバヤ等における作戦支援を円滑適切に実施するためであり、実施の細部指導は、主として内藤軍参謀が担当した。

20日、第六十一戦隊長堀川少佐は、左記要旨命令を下達した。

一 ボルネオ島「バリクパパン」沖ニ来襲セル敵機動部隊ハ戦艦及重巡ヲ基幹トシ三万噸級「タンカー」三隻ヲ伴ヒ其ノ他ノ艦艇二十数隻ヨリ成リ逐次兵力ヲ増強シツツ我カ陣地ニ対スル艦砲射撃ヲ強化シツツアリ
二 戦隊ハ六月二十五日二〇〇〇此ノ敵ヲ求メテ攻撃セントス

機長 新富中尉、沼田中尉、
攻撃隊長 中嶋少佐、
高田中尉、安田中尉、

中村少尉、山打准尉、
井野准尉

触接機長 吉谷大尉
攻撃目標 大型「タンカー」、

飛行第六十一戦隊は、第三航空軍隷下の重爆撃隊で、最新鋭の四式重爆撃機「飛龍」を装備する精鋭部隊であった。しかも、大東亜戦争末期において、四式重の性能を活かし、敵艦船に対する雷撃部隊として特別錬成訓練を積み、航法要員他海軍飛行兵曹等を搭乗させ、陸海一体となって敵艦船特別攻撃を敢行し、稀にみる戦果を挙げた部隊である。その活動を公刊戦史等から抜粋すると次のとおりである。

① 飛行第六十一戦隊(戦隊長堀川少佐)は、昭和20年2月下旬チャンギー飛行場に進出し、第三航空軍指揮下に編入された。第三航空軍では、四式重の性能と同戦隊の希望等を勘案して、雷撃部隊として運用することを決め、在シンガポール第五航空艦隊駒形少佐以下多数の積極的な指導支援を受け、雷撃訓練及び夜間洋上航法訓練を重点に特別錬成訓練を開始した。なお、戦隊の洋上航法能力を補うため、海軍の航法員十数名(主として兵曹)が配属され、陸海一体となって相共に行動す

四 戦艦、重巡、軽巡ノ順トス
搭載魚雷 海軍九一式改七魚雷
(一、〇五五艇)

四、五米

五 通信 攻撃隊長機ト接触機関及之
ト対空無線トノ通信ハ自由通信ト
シ、他ノ攻撃機ハ突撃開始迄封止停
受ノミトシ突撃後ハ全機自由通信ト
ス

六 帰還飛行場トシテ爪哇島内ニ「ス
ラバヤ」「マラン」「バンドン」「ジャ
カルタ」「ラ」「セレベス」島ニ「リ
ンブン」「ピンラン」飛行場ヲ準備
シ「セレベス」島「リンブン」飛行
場二次ノ者ヲ派遣シ夜間設備ニ任セ
シム 派遣将校 川島中尉、同付

七 別ニ一機ヲ以テ攻撃隊ノ「スラバ
ヤ」前進以後周辺海上ノ哨戒ニ任セ
シム(福留大尉之ニ任ス)

八 攻撃隊カ「スラバヤ」ニ前進セハ
友軍戦闘隊カ上空ノ制空ニ任スル筈

九 余ハ攻撃前日接触機ト共ニ「スラ
バヤ」ニ前進シ地上ヨリ無線指揮ス

◇

攻撃隊は、木下軍司令官から「七生
神雷隊」と命名された。

6月24日、堀川戦隊長及び海軍雷撃
指導教官駒形少佐らは、吉谷大尉の触
接機でスラバヤに前進した。

⑤ 6月25日早朝、攻撃隊8機は4編
隊に分かれ、企図秘匿のため各編隊ご
と陽動飛行を実施しつつ正午前までに
スラバヤに集結、所在第二南遣艦隊魚
雷調整班の支援を受け、搭載魚雷の最
終点検調整を完了、出撃を待機した。

16時過ぎ、白銀第七飛行師団長を始め
近隣の陸海軍部隊員多数の激励の辞を
受け、壮行の乾盃をした後、木下軍司
令官揮毫の七生神雷隊の鉢巻をしめて
機上の人となった。16時頃入手した司
偵の情報は、「敵情変化なし、目標付
近上空快晴」であった。

17時30分頃接触機離陸先行、攻撃隊
はその20分後から逐次離陸、空中集合
したが、沼田、高田、井野機故障のた
め、5機編隊高度700mで航進した。

30分後、井野機が追及し、更に30分遅
れて高田機が追及した。

先行接触機からの入電は全くなく、
敵哨戒機に撃墜されたものと判断した
攻撃隊長は、予定していた自力索敵要
領に従い、まずボルネオ島東南端に進
出、ここから敵レーダーの捕捉を避け
るため、高度を70mに下げ、東岸沿い
に索敵しつつ北上した。日没頃スコ
ーに遭遇、難航の後これを突破し、お
おむね快晴のバリクパバン南方20km
付近に進出、同市外東方20km、30km
の洋上に一群の敵艦隊を発見、右梯形

隊形のまま高度を下げつつ右旋回して
突撃を開始した。中村機、安田機、中
嶋機の順に魚雷発射、続いて井野機、
高田機も発射に成功、新富機もまた突
進したが、タンカーと見た目標が駆逐
艦であったため発射中止、攻撃復行に
移る直前、右後方の中嶋機が胴体タン
クから発火、そのまま約70m引き上げ
た後掃海艇に突入、壮烈な自爆を遂げ、
更に右前方を火達磨となって山打機が
突入した。新富機は一旦北方に離脱後、
反転南下し、市街地上空を通過、重巡
に突進発射、前甲板スレスレに東洋
上に離脱したが、既に胴体タンクに被
弾し燃料を噴き、遂に左発動機が停止
してリンブン飛行場着陸時大破した。

中村、安田、高田、井野各機は無事ス
ラバヤに帰還中であつたが、中村機は
途中戦隊長の指令を受けリンブンに変
針、新富機乗員を收容し、翌26日スラ
バヤに帰還した。

攻撃隊は戦艦又は重巡2隻轟沈、大
型タンカー1隻撃沈の戦果を確認した
が、バリクパバン守備隊の目撃及び26
日9時現在における陸上からの目視等
により、総合戦果として「轟沈 巡洋
艦若くは大型駆逐艦二隻、大型駆逐艦
一隻、駆逐艦若くは掃海艇一隻、撃
沈 二万トン級油槽船一隻、巡洋艦若
くは大型駆逐艦一隻、艦種不詳体当た

り一隻、同火柱一隻」計八艦船を轟沈
破と発表された。攻撃隊の損害は自爆
二機、未帰還一機、大破一機であつた。
○七生神雷隊に感状授与

南方軍総司令官は七生神雷隊の赫々
たる戦果に対し、8月8日左記感状を
授与し全軍に布告した。

感 状(写)

特別攻撃隊七生神雷隊
陸軍少佐 中嶋 要
以下(別表)

右者昭和二十年六月二十五日「バリ
クパバン」附近ニ来寇セル敵艦船攻撃
ノ命ヲ受クルヤ必死必沈ノ意氣「二語
不明(高ク)勇躍「三語不明(戦機熟)」
シタル海上ヲ翔破シ巧ニ敵電波探知機
ノ警戒網ヲ突破二十時三十分頃目標上
空ニ進攻敵艦船ヲ捕捉熾烈ナル弾幕ヲ
冒シテ超低空必沈ノ雷撃ヲ加ヘ且夫々
壮烈ナル体当リ攻撃ヲ敢行シテ敵艦船
ヲ轟沈セシムルノ赫々タル戦果ヲ収メ
タリ

是至誠尽忠悠久ノ大義ニ生キントス
ル崇高ナル皇軍ノ真髓ヲ發揮セルモノ
ニシテ其ノ行動真ニ壮烈其ノ武功拔群
ナリ

仍而茲ニ感状ヲ授与シ之ヲ全軍ニ布
告ス
昭和二十年八月八日
南方軍総司令官 伯爵 寺内壽一

(本感状は戦死者の叙位叙勲のため、賞勲局が南方軍から電報で受信したもので遺族だけに本写が配布された。)

七生神雷隊人名表(順序不同)

一番機(中嶋要少佐、新道定信大尉、

(自爆)前田正八准尉、加藤清八郎曹

長、谷義美曹長、内倉龍三軍

曹、高田政三軍曹、尾川延雄

飛曹長(海軍)

二番機(中村政吉少尉、岡部登曹長、

村松忠男曹長、近藤正利軍曹、

畑登軍曹、岩城良長軍曹、黒

田一夫兵長)

三番機(新富正清中尉、小野村義忠中

(大破)尉、村田博少尉、川崎清曹長、

原先勝曹長、濱端松夫曹長、

久保田留吉軍曹)

四番機(山打一雄准尉、馬場重男曹

(自爆)長、中村雅治曹長、加藤與一

軍曹、大栗清一郎軍曹、根木

禎二軍曹、大杉良上飛曹(海

軍)

六番機(安田庫太郎中尉、酒井高雄中

尉、湊好夫曹長、久保田喜志

夫曹長、赤石武雄曹長、古閑

義民軍曹、堀田兵曹(海軍)

宇野濱記者)

七番機(高田泰治中尉、北村為三少尉、

山田秀雄曹長、稲垣梅次曹長、

春口雪雄曹長、松岡保夫軍曹、

山田二榮軍曹)

八番機(井野正巳准尉、星野喜八郎曹

長、中村喜次郎曹長、菊池勲

曹長、姫野清彦軍曹、小池英

一軍曹、中村圭彦兵長)

触接機(吉谷正之大尉、山中嶺一郎中

(未帰還)尉、前間久重少尉、眞仲康四

曹長、田中公福曹長、細江源

之助曹長、河原銀之軍曹、立

原幹一軍曹、衛藤親思少尉(海

軍)

(海軍軍人には、南西方面艦隊司令長

官から、別に授与された由である。)

(飯田正能記)



出撃前の中嶋少佐と各機長



七生神雷隊のスラバヤ出撃と同隊の鉢巻

四式重爆撃機 「飛龍」

Spec

4式重爆撃機「飛龍」

全長×全幅：18.7×22.5メートル

自重：8,649キログラム

乗員：6～8名

発動機：三菱ハ-104空冷1,900馬力

最高速度：時速537キロ

航続距離：3,800キロ



フィリピン慰霊の旅

—永富雅夫・永富章夫

—両中尉を偲ぶ—
会員 武谷 孝生

ました。

また、私の叔父に当たる富永章夫陸軍軍医中尉も、第10師団第1野戦病院(鉄5457部隊)に所属し、フィリピン・ルソン島で戦死していますので、平成25年8月25日、ルソン島のカリラヤ比日霊園近くの川に、両名並びにフィリピンで戦死された方々の御霊をお慰めするため、精霊流しをお願いしました。

以下に関連する記事や思い出の記などを写真と共に綴ってみました。

○永富雅夫兄さんの思い出

私の母の従姉弟に当たる永富正夫海軍中尉(戦死後2階級特進、海軍少佐)は、関西学院高等商業学校卒、海軍予備学生13期出身で、神風特別攻撃隊第19金剛隊(零戦隊)に所属、昭和20年1月6日、フィリピン・マバラカット基地から出撃し、リンガエン湾内の敵艦船を特別攻撃し、散華しました。

昭和19年の春頃、見慣れない小包が配達されてきた。母から「雅夫さんの実家から送られたきた物だから開けては駄目ですよ」と言われ、早く雅夫さんが来ないかと待ち遠しかった。



て攻航に特別高
しに神風の
顔に台湾の
ぬ神の
死に。 (1944) 12月か。
日に。撮す。
十日に。撮す。
数し撃た。撮す。
後に出撃。撮す。
日晴れ。撮す。
数晴れ。撮す。
あは、隊空基地

間もなく、真っ白な海軍の軍服を着た雅夫さんがやって来た。小包を開いて、出てきた羊羹をガブリと食べ、歯形がクツキリと付いたのを「孝生ちゃんも食べる？」と聞かれて頷くと、ナイフで切ってくれたので、一緒に食べた。こんなに甘い

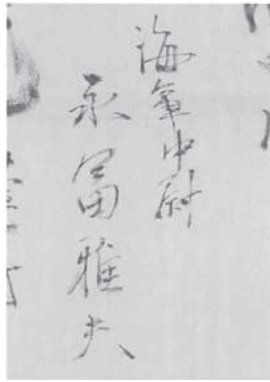
ものは、それまで食べたことがなかったもので、今でも羊羹を食べると思い出します。

雅夫さんとは、母の従姉弟で、私は従兄弟半に当たる。永富(本人の署名は「富」ではなく「富」である。)雅夫といい、関西学院高等商業学校を卒業して入隊し、海軍予備学生となり、当時は、海軍少尉として大村の海軍航空隊(現長崎空港)に所属していた。母とは従姉弟同士の気安さから、居心地が良かったのだろう、その年の春から夏にかけて、殆ど毎週のように、金曜日になると家に来ていた。そして、母の心尽くしの昼食を食べながら「茶碗はいいなあ」などと言っていた。それから、畳の上で大の字になってレコードを聴き、縁側で猫をあやしんだりしていた。当時、私は国民学校の1年生であったが、軍の料亭に連れて行ってくれたり、何時も本やレコードを買ってくれたりしていた。シューベルトの「魔王」やグノーの「兵士の合唱」のレコードは、今でも博多の家にある。

人も私達に敬礼をしてくれ、周りの人は何事かと見ていたが、私は得意の絶頂にあった。

その頃、夜になると、殆ど毎日のように空襲があった。防空壕を掘った土の上に植えていたトマトが熟したの、母は雅夫兄さんに食べさせると言っていたが、とうとう夏の終わりに来なくなった。戦地に行くという情報があったのだろうか、母は、デパートや老舗などを探し回り、なけなしの衣料切符で、絹のマフラーを手に入れて雅夫兄さんに送ったようだ。

母が「航空隊のパイロットは危険でしょう」と言った時「僕達はどうせ死ぬのだから、陸軍みたいに、泥に這いつくって死にたくない、伯母さんや孝生ちゃん達のために戦って死ぬのだから・・・」と言っていたということを、後日、母から聞いた。母は、雅夫兄さんのことは、特攻隊に志願したことが新聞に報道された時も、特に戦後は私に聞いても何も話さなかった。ニュース映画で、出撃の際の様子を見ようと姉達に頼んで映画館に行ったが、上映されなかった。ただ一度だけ、雅夫さんの形見の品が送られてきた時、雅夫さんのお母さんから、雅夫さんが自分の自宅に來訪したこと、前線基地へ出発する際、自宅上空を数度旋回し、南



高木大尉のマフラーに書いた、雅夫兄さんの遺墨。

方へ飛んで行ったことなどで、十分に別れをしたとの話を聞いた。

戦後、知り得た当時の状況(戦況と特攻出撃)は次のとおりである。

昭和19年の9月に入って以来、米機動部隊がフィリピンに空襲を掛ける都度、次の決戦場がフィリピンであることが明らかとなってきた。その後風雲急を告げ、10月18日に、フィリピン決戦の捷一号作戦が発動された。10月24日、26日には比島沖海戦が展開され、神風特別攻撃隊・敷島隊が25日に爆装零戦で米護衛空母に体当たりを敢行した。それから10日足らずの後、11月3

日、元山空では、兵学校出身者を含む士官次室の士官、中・少尉が呼び集められた。

まず、司令・藤原喜代間少将が困難な戦況について説明し、続いて飛行長・小川二郎少佐が「戦局打開のために一機一艦を葬るしかない」と、特攻攻撃に言及し、熟慮の上で志願するように伝えた。

この時の様子を記憶する土方敏夫氏は、司令の部屋を3日間開けておくから、志願者は志願書を書いた封筒に入れて机の上に置くように、と小川飛行長は述べたという。

特攻隊員に選ばれた予備学生13期出身者は、前期と後期(前期146名と後期110名のうち)を合わせて14名で、指名は、大勢の士官達の前で口頭でなされた。彼らの肩書きは第201航空隊付に変わっていた。

指名を受けて雀躍という感じだったのが、永富雅夫少尉と井野精蔵少尉であった。永富少尉の机上に血痕を見た同室(2名1室)の小野少尉が「やっだな」と感じたとおろし、『大熱望』としたためた血書を司令に提出していたことが分かった。

台湾で、12月21日、予備学生9期出身の高木大尉が、着用のマフラーを広げ、親しくなった元山空の特攻隊員に

間もなく遺墨になるであろう寄せ書きを求めた。このことは、豊廣 稔氏が「なにわ会ニュース60号14頁・平成元年3月掲載」『福山正通少佐を想う』に詳しく書いてある。高木大尉は生き残り、マフラーだけが大尉の手もとに残った。沢井氏と大町氏の手により、靖國神社遊就館に奉納されていて、平成23年9月6日に見せていただいた。

この際、写真撮影は許可されたが、公開は、寄贈者の許可が必要であるので、雅夫兄さんの遺墨のみを掲載する。(渡辺洋二著『特攻の海と空』個人としての航空戦史) 文芸春秋社発行14頁より抜粋し、加筆した。

○海軍中尉 永富雅夫 遺書

(神風特攻・第19金剛隊、大正10年1月2日生まれ。関西学院高商卒。昭和20年1月6日、比島リングアエン湾にて戦死。24歳)

「天恩・地恩・父母の恩・師の恩・友の恩、雅夫は実に幸福な25年を過ごしてきました。感謝の裡に散り得ることを実に幸福に思い、唯御国の為立派な死に方をしたい気持ち。

新春というのに飛ぶホタルを見つ、微笑を浮かべつつ飛び立って征きます。後に続く者を信じつつ。

新春や 南海の空 蛍飛ぶ
空染むる 愛機に託す 吾が命

微笑浮かべつつ毗を上げ、父母よ来たり給えよ靖國へ！微笑浮かべ微笑を浮かべつつ待つ。(比島前線基地にて出撃前夜)

※雅夫さんはクリスチャンであった。

遺書の天恩とは、①天のめぐみ。造化の恩恵。天恵。天眷。*日葡辞書(160304)「Tenyon (テンラン) テンノラン(訳)天の、つまり神の恩恵」②天子の恩。皇恩。君恩。朝恩。天眷。・と、日本語大辞典第14卷(小学館) 昭和50年に記載されている。

○神風特別攻撃隊第19金剛隊 マバラカット基地発、リングアエン湾内艦船攻撃

昭和20年1月6日 聯合艦隊告示85号 (※戦死者のみ公表か。)

昭和20年1月5日「第十九金剛隊」(※編成日か。出撃は1月6日が正しい。)

爆装零戦15機/直掩零戦2機201空

第一区隊

第一隊

一番機

青野 豊大尉(愛媛・海兵70期)

二番機

真崎義男上飛曹(佐賀・乙飛12期)

三番機

雅夫兄さんが長崎のレコード店で買い求め、家の畳に寝転がって聞いていたもの。長崎には、カソリック信者の人々が多く住んでいたの、このようなレコードがあったと思われる。



シューベルト作曲 魔王



シューベルト作曲 影法師



グノー作曲 兵士の合唱—歌劇「ファウスト」より ベーム指揮



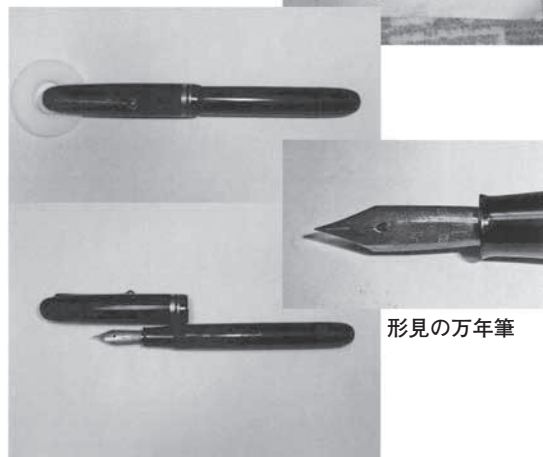
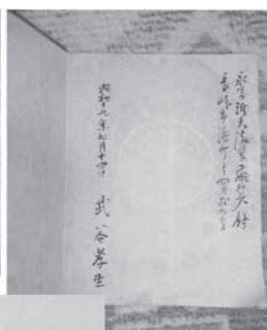
ウェーバー作曲 獵夫(狩人)の合唱 歌劇「魔弾の射手」より ベーム指揮



クリスマスの鐘—1



クリスマスの鐘—2



形見の万年筆

昭和20年6月頃、形見として写真、ナイフ、鉛筆等と、送られてきた。両面に3匹の犬の模様のナイフは、大変気に入っていつも持ち歩いていた。小学校5年生の時遠足に持って行き無くした。今も、あの時の悲しい気持ちは思い出す。

- 四番機 串原麟八上飛曹 (長野・乙飛12期)
- 三番機 青野国輝一飛曹 (愛媛・丙飛14期)
- 第二隊
- 一番機 伊藤勝美上飛曹 (島根・乙飛11期)
- 二番機 和田可臣飛長 (秋田・乙飛特2期)
- 三番機 後藤喜一上飛曹
- 四番機

- 第二区隊
- 山田正文上飛曹 (長野・乙飛12期)
- 第一隊
- 一番機 福山正通中尉 (奈良・海兵72期)
- 二番機 富沢幸光中尉 (北海道・予備学13期)
- 三番機 永富雅夫中尉 (大分・予備学13期)
- 四番機 黒木典次二飛曹 (鹿児島・丙飛11期)

- 第二隊
- 一番機 山下省治中尉 (福岡・予備学13期)
- 二番機 磯部 豊中尉 (愛知・予備学13期)
- 三番機 浜砂良一一飛曹
- 直掩隊
- 一番機 真鍋秀信上飛曹 (佐賀・乙飛12期)
- 二番機

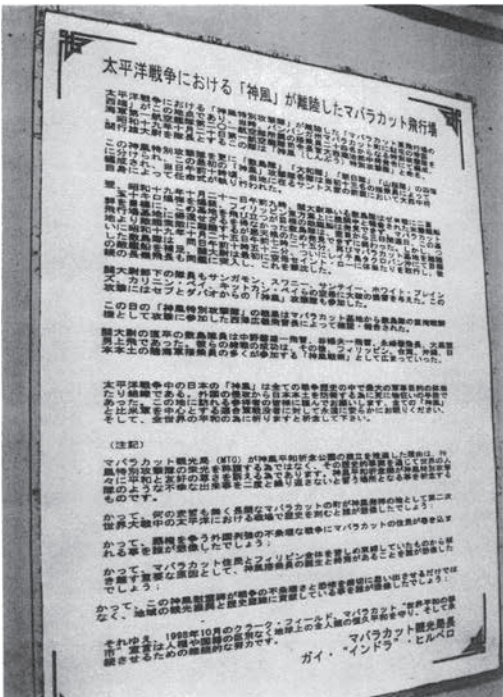
- 高橋良生上飛曹
- 【経過】
- 11・25 マバラカッタ基地を発進。
- リングエン湾口の戦艦2隻、巡洋艦、駆逐艦各5〜6隻、湾中央の小型輸送船及び駆逐艦、計40隻からなる艦隊を発見。攻撃を敢行、巡洋艦1隻大破炎上、輸送船4隻を撃破した。
- 後藤喜一上飛曹は、小型輸送船、上陸用舟艇30隻に対して爆弾を投下した後、マバラカッタ基地に帰還。



平和観音像の前で、平成23年10月25日、日本海軍が作戦として、神風特別攻撃隊 敷島隊等を結成し、関大尉等が飛び立った日毎年、マバラカット町クラカフィールド・リリーヒルで挙行されている「特攻隊没者等慰霊祭」に参加した。



東マバラカット飛行場跡にある記念碑「第二次世界大戦に於いて日本神風特別攻撃隊が最初に飛立った飛行場」。雅夫兄さん達も、この飛行場から出撃した。



上記記念碑の右側、海軍旗の下にある碑文

浜砂良一 一飛曹は搭乗機不調のため引き返す。

【1月6日の総合戦果】

《連合軍側記録》

沈没・掃海駆逐艦「ロング」…1機命

中、2機至近(戦死1名、負傷35名)

中破・戦艦「ニューメキシコ」…1機

命中(戦死36名、負傷87名)

中破・戦艦「カリフォルニア」…1機

命中(戦死、負傷共に多数)

甚大・重巡洋艦「ルイスビル」…2機

命中(戦死多数、負傷126名)

*2回目

中破・重巡洋艦「ミネアポリス」…1機命中

中破・豪重巡洋艦「オーストラリア」

…1機命中(戦死14名、負傷26名)

*3回目

甚大・軽巡洋艦「コロンビア」…1機

命中、1機至近

中破・駆逐艦「ニューコム」…1機至

近(戦死2名、負傷15名)

中破・駆逐艦「アレン・M・サムナー

1機命中(戦死14名、負傷29名)

大破・駆逐艦「ウォーク」…1機命中

(戦死13名、負傷34名)

大破・駆逐艦「オプライエン」…1機

命中

○東マバラカット飛行場跡にある記念碑の碑文

太平洋戦争における「神風」が離陸したマバラカット飛行場

太平洋戦争における「神風特別攻撃隊」が離陸した「マバラカット東飛行場の西端」がこの地点であり、当時、パン

パンガ州マバラカット町に駐屯してい

た帝国海軍第一航空艦隊第二〇一航空

隊所属の搭乗員二十四名からなる特別

攻撃隊を、昭和十九年十月二十日第一

航空艦隊司令長官大西瀧治郎中将の発

令にて構成。関行男大尉を隊長とする

この隊は「神風(しんぷう) 特別攻撃

隊」と命名。

この神風特別攻撃隊を更に「敷島隊」

「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」の四隊

に分けられ、この最初の「神風」攻撃隊各隊は当初十三名の搭乗員によって編成され、当日午前十時頃、当地に在るサントス家の前庭において大西中将自身によって任命式が執り行われた。

翌、昭和十九年十月二十一日午前九時、

関大尉率いる敷島隊はゼロ戦に

二百五十キロ爆弾を爆装、フィリピン

東方海上に展開中と報告された米国艦

船群を目標に、この基地を飛び立つが

目標の敵艦船は発見できず、マバラ

カット飛行場基地に帰還せざるを得な

かった敷島隊は、翌日から三日間連日、

この基地より敵艦索敵に離陸するが悪

天候のため発見できずに終わった。し



アラヤット山



神風神社にある特攻勇士之像の前で

お眠りください、そして、全世界の平和の為に祈りますと祈念して下さい。

(注記)

マバラカット観光局(MTO)が神風平和祈念公園の建立を推進した理由は、神風特別攻撃隊の栄光を称賛する為ではなく、その歴史的事業を通じて世界の人々に平和と友好の

尊さを訴える為であります。神風平和記念碑が神風特別攻撃隊のような不幸な出来事を二度と繰り返さないということを誓う場所となる事を祈念するものです。

に貢献している事を誰が想像したでしょう。それゆえ、1996年10月のクラーク・フィールド、マバラカット、世界平和の都市宣言は人種や国籍の区別なく地球上の全人類の恒久平和を守り、そして永続させるための継続的な努力です。

マバラカット観光局長

ガイ・ギンドラ・ヒルベロ

◇ (注)・・・マバラカットの海軍第一航空艦隊201空の搭乗員達が毎日、そ

して特攻出撃の朝に最後に見たであろうアラヤット山の姿を遠くに眺め、大変感慨深いものがありました。同封の

碑文は、慰霊碑を建立した現地マバラカットの篤志家の手による説明文ですので、多少日本語として不自然な言い回しの部分がありますが、旧海軍の関係者や御遺族ではなく、現地フィリピン人篤志家によるものである事が、大変意義深いと存じます。

井上孝之氏の書簡より

かし、遂に昭和十九年十月二十五日午前七時二十五分、再びマバラカット基地を離陸した敷島隊は、同日午前十時五十二分、ついにレイテ島タクロバン沖にて目標の敵艦船を捕捉、関大尉は最初に空母セイント・ローに体当たりを敢行し、後続の長(永)峰飛長も同艦に突入し、これを撃沈した。

関大尉部下の隊員もサンガモン、スワニー、サンティー、ホワイト・ブレインズ、カリニン・ベイ、キットカン・ベイらの空母に大破の損害を与えた。この攻撃にはセブとダバオからの「神風」攻撃隊も参加した。

この日の「神風特別攻撃隊」の戦果はマバラカット基地から敷島隊の直掩戦闘機として攻撃に参加した西澤広義飛曹長によって確認・報告された。

関大尉直率の敷島隊員は中野磐雄一飛曹長、谷暢夫一飛曹、永峰肇飛長、大黒繁男上飛であった。彼らの緒戦の成功は、その後、フィリピン、台湾、沖縄、日本本土の陸海軍搭乗員の多くが参加する「神風戦術」として広まっていった。

太平洋戦争中の日本の「神風」は全ての戦争歴史の中で最大の軍事目的の体当たり組織である。外国の侵攻から日本本土を防衛する為に死に物狂いの手段であった。

この地に訪れる参拝者の皆さまに謹んでお願いいたします。

全ての「神風」と比米軍を中心とする連合軍戦没者に対して永遠に安らかに

尊さを訴える為であります。神風平和記念碑が神風特別攻撃隊のような不幸な出来事を二度と繰り返さないということを誓う場所となる事を祈念するものです。

かつて、何の変哲も無く閑閑なマバラカットの町が神風発祥の地として第二次世界大戦中の太平洋における戦場で歴史を刻むと誰が想像したでしょう。かつて、覇権を争う列強の不条理な戦争にマバラカットの住民が巻き込まれる事を誰が想像したでしょう。

かつて、マバラカット住民とフィリピン全体を苦しめ束縛していたものから解放する重要な原因として、神風搭乗員の誕生と終焉があることを誰が想像したでしょう。

かつて、この神風慰霊碑が戦争の不条理さと恐怖を痛切に思い出させるだけでなく、地域の観光振興と歴史認識



リングエン湾の北東の山々と、かすかに灯台を望む。



平成25年8月25日カリラヤ比日靈園近くの川に、フィリピンで戦死された方々の御慰霊を少しでもお慰めする精霊流しを(曙光会・マニラ)お願いしました。
 雅夫さんは、本文に記載した方で、章夫叔父さんは、軍医(中尉)(第10師団第一野戦病院(鉄五四五七))で、ルソン島で戦死しております。お二方の消息をご存知の方や、記載された本などがありますれば、お教え願いたいと存じます。

特攻隊戦没者慰霊顕彰会会員 武谷 孝生

四式戦特攻

—突入時とトリムタブ—

第194振武隊長

堀山 久生 (陸士57期)

○私は昭和20年5月22日、第30戦闘飛行集団司令部(市ヶ谷台)で、新藤常衛門大佐(比島・第16飛行団長として活躍された有名な方)から、口頭で、「仮編決と号第194飛行隊長」を命ぜられた。「仮」とは、天皇が命ずる「正規の編成」によるものではなく、志を同じくする同志の「仮」の編成の意味で、「特攻は、陛下の御徳を汚す」との、阿南陸軍大臣の御意向で、こうなったと聞く。翌23日、東京都板橋区成増の飛行第47戦隊で部下を掌握し、第194振武隊を編成し、6月3日、群馬県館林に電車で移動し、四式戦闘機(疾風)の新品を受領し、訓練に入った。遅く訓練を始めたので、「編隊飛行」までで、超低空の攻撃訓練は一度も経験していない。

増の「申送簿」に「浮き角の処理悩む」と記入し、それが非力な私の腕力でできるだろうかと危惧された。

○この四式戦に、初めてトリムタブが操縦系統の一部に装着された。トリムタブは、昇降舵に更に付加された小翼で、上昇の場合は、「上げ」に転把を事前に回すと、トリム翼が上がり、昇降舵、尾部も下がり、機首が極く軽い力で上に向き、機首を下げるには、転把を前に押す。極く軽く機首の上下ができて、腕力は不要で済む。

○昭和19年9月陸軍航空総監部配布の「飛行教程別冊・キ84操縦法」にトリムタブ(以下「タブ」と略す)に関する記事がある。操縦席内で、操作転把を、機首上げは左回転、機首下げは右回転すると、1回転で2.5度、最大4.9回転で12度まで作動できた。通常は5度位までであった。私のいた館林でも通常、タブは飛行場の場周経路の離着陸飛行で常用されていた。それまでは、陸軍の戦闘機に、操縦者が空中で「タブ」を修正することはなく、97戦以降戦闘機は、固定のタブが方向舵、昇降舵に付き、地上整備員が「補正」をしていた。

○今から20年前の、平成7年8月15日発行の『陸士57期航空誌・総合編・特別攻撃隊』の611頁、久保田尚美中尉(航士57期、明野、館林四式戦特攻指導教官)の投稿、平成26年5月8日に、小生は偶然発見した。「今や91歳で、命旦夕に迫った」というのに、遅過ぎる発見であった。

内容は以下のとおりである。

① 特攻機の離陸 3000rpm、ブースト+350ミリ、浮揚後は2900rpm、ブースト+250ミリ。

② 航進 高度の選定などは、状況により異なるが、速度は巡航約300km、戦闘巡航350kmに、どこから速度を上げるかは、隊長の判断による。

③ 突入 占位点では、ピトー管付近で目標を捉える。降下旋回の開始は、突入角度で異なる。突入高度2000乃至2500m、突入速度400km、突入角度は45度以上、緩降下は30度以上、超低空は高度50m以下。いずれもパワー全開、3100rpm、ブースト+350ミリ。過速による操縦の困難性については、四式戦では、昇降舵のトリムタブの操作により、大きな問題はない。但し、特攻の攻撃成功か、不成功かについての、操縦上の先訓がない(注・操縦者は戻って来ない)ため、これを望み得ない。突入に至

るまでの損害の減少、したがって、成功率の向上を考えるならば、最も望ましい接敵突入は、超低空による可とする。但し、このためには操縦者の高い練度が必要であり、昭和20年5月以降に編成された飛行時間100時間少々程度の練度では困難であったと思える。

④ その他、夜間海上片道300kmの飛行訓練目標を指示されていたが、基礎となる離着陸飛行訓練も、技量的には無理で、目標は「絵にかいた餅」の感があった。以上

○久保田君が指導した館林での四式戦の突入訓練は、飛行場北の東武鉄道・小泉線に沿った松林を掠め、更に高度を10乃至15mに下げ、550乃至580km/hで南に突っ切るといっても、見ていると凄く殺気を感じた。重量物搭載でない普通の機体であった。館林の12個の四式戦特攻隊長は全員、昭和19年4月の、地上兵科からの「航空転科」で、彼の言う「操縦時間100時間少々」という部類であった。このための「タブ」使用を彼から聞いた覚えはない。

我々が自発的にタブを、試験飛行で使用した館林での例を2点述べよう。

① 藤井常男中尉(第188振武隊長・

陸士57期・機甲兵より転科)は重量物搭載試験飛行を行った。高度4000mで、水平飛行を行う。2900rpm、ブースト+250、380kmあたりから、機体が浮き上がり、機首を下げれば更に上がる。高度計が4100mになり、操縦桿の押さえに力が必要なので、タブを調整して対応した。速度はそれ以上にはなかなか上がってくれない。思い切ってブースト+300以上までレバーを押し、400kmで速度試験を終えた。このため、特攻出撃最後の飛行場で、いきなり「重量物搭載」(爆弾を抱いて)で離陸に失敗した実例もあり、また、操縦桿が重くなり、敵の射弾回避もままならないであろうと感じた。

② 堀山久生中尉(第194振武隊長・

陸士57期、野砲兵から転科)は急降下からタブで上昇した。当時勤労働員の素人が作った四式戦は、桁に乗せたジュラルミン板2枚に5ミリの幅で開きがあり、何時空中分解せぬかと飛行機に乗るのが恐ろしくなっていた。速度も規定の高度6400mで、時速624kmは難しかろうが「急降下でそれを試してみよう」と、高度4000m、角度35度、レバー全開

で降下。やがて3式速度計で624kmを視認し、「これならまあ、敵から逃れられるなあ」と了解した。さて、これから上昇するには、操縦桿をぐっと引くと、上昇姿勢のまま、暫く沈むと聞いている。ならばタブでと、タブを回したら実に滑らかに上昇できた。タブで上がるなら下がるはずだ。特攻体当たりの最後の「浮き角処理」に使えないかと、「考える頭」が当時はなかった。今頃気が付いたのである。

③ 戦後、『館林の空』刊行のため、

指導を仰いだ、当時の防衛庁図書館の戦史官・服部省吾空自1佐は、著書『操縦の話』(技報堂)に、タブを使って高度10mでも15mでも、無限遠の距離に目標を一旦合わせた

ら、そのまま飛行すればよいと、イラストで説明されている。

○今にして思えば、館林の特攻隊は、日本一の大部隊で、最新鋭機80機が当時展開していた、最大の特攻基地であった。四式戦12個隊、100式司偵4個隊、キ115戦3個隊の合計19個隊、隊員122名であった。私は平成14年に、3年をかけて調査、編集した『館林の空 第30戦闘飛行集団 館林集成教育隊』という本文200頁、資料68頁、写真256点の記録集を出版

した。450部印刷し、1部3500円で隊員等に完売し、以後はCDを千円で頒布した。

○この7月10日、「館林の特攻アルバム」に、四式戦の操縦席の写真2枚を発見した。1枚目は計器盤。2枚目はレバー付近で、どうもタブはレバーの手前に、レバー同様転把縦方向に付いていたようだ。前述の「キ84操縦法」の記事中、第27の、機首上げは転把を左回転、下げは右回転というのは、正

面から見た時の説明で、縦方向に転把が付いておれば、機首上げは「手前に引き」とか、機首下げは「前に押す」ことになる。それで前記テストの際、右手は操縦桿を握り、左手で転把を手前に回して、上昇したことを思い出した。

○陸軍は本土防衛最後の決戦に備え、最新式の四式戦特攻は全国で28隊、第1航空軍に8隊(下館2隊、武蔵高萩2隊、相模中津4隊)、第6航空軍は、第30戦闘飛行集団に14隊(都城2隊、館林12隊)、第20戦闘飛行集団6隊(北

伊勢)を待機させた。

現存する陸士57期の特攻隊長は、最近の高齢化で、野上五夫(第196振

武隊)、藤井常男(第188振武隊)、堀山久生(第194振武隊)の3名のみである。

○陸軍のこの事例は、知覧特攻平和会館の八巻専門員の取材によると、第100飛行団部員滝山 和少佐(陸士49期)の実例—南満の第104戦隊長から、昭和20年3月都城に赴任され、4月、5月、6月の四式戦沖繩特攻の出撃に際し、第57、58、59、60、61振

武隊に、出撃前の地上整備で、タブを「下げ」に補正させ、航進の際は、操縦を、「少し上げ舵で行くよう」指示された、という。

滝山先輩は、「首都圏明野会」の会長を務められ、小生はその事務局長としてお仕えしたが、明野会というのは、明野飛行学校出身の陸士将校団の集まりで、「語り部」としての仕事を残し、最近高齢化によって解散した。

○以下は海軍の事例である。友人の押尾一彦氏(四式戦はじめ陸軍航空の研究家)に、タブに関する情報の提供を依頼したところ、以下2点の情報を頂いた。

①『零戦かく戦えり』(文春ネスコ・2006年6月30日発行、柏倉信弥著・大正3年生まれ・海軍操縦練習生30期、「比島への零戦特攻の空輸」344頁・「台中飛行場は標高200メートルにあることに気付く。機首上げにタブの調整をする。これは、超低空で高速飛行をする時

に、海面に突っ込むのを防ぐ鉄則である。」

② 『修羅の翼』(光文社・2003年

5月2日発行、角田和男著・大正7年生まれ・乙種飛行予科練習生、205頁。「危ない、今敵に遭遇すれば、爆撃隊の援護に間に合わないばかりでなく、中隊相互の援助も困難だ。私の機も操縦桿を力一杯突っ込んでも、高速の為押さえ切れない程だ。止むを得ず、尾翼変更片(タブ調整)をダウンに取る。これは危険だ。空戦には不利だ。しかし、爆撃隊より離れない、為止むを得ない。2中隊はますます遅れ、数千メートルの距離を空けてしまった。」

③ 陸士57期と同期の海兵73期生の友人の零戦パイロットに、タブのことを聞いてみたが、「空戦には使われない」という。海軍の古い年齢のベテランの方の実力は、「我々とは比較にならない程素晴らしい腕前」と痛感した。

○堀山試案・タブで服部案の如く(当時陸軍の航空本部も気付いたとして)地球の湾曲に沿って飛び、敵のレーダー網を潜って、超低空で隠密裡に接近できたなら、途中の航法、素敵も、戦闘機の過敏な舵の上下の修正を抑えて、飛行も楽になるはずである。そし

て最後は、タブで機首を下げて、体当たりすれば、もう満足できたらう。

計算を簡単にするため、仮に地球の湾曲は36キロで、特攻機の時速360キロ、分速6キロ、秒速100米と簡略にしてみよう。敵のレーダーは優秀で、高度を取ると200キロ先で上空の機影を捉えていた。これを回避するため、第181振武隊長 壱大尉は、高度100米、関東地方で航法の訓練を実施されている。それでも最初はつかまるが、途中で高度を下げて避け、今度は「地球の湾曲」に沿って、レーダーには見えない「超低空接近」に移れば、敵も機影を見失う。再び発見した時は、もう36キロ手前に来ている。36キロは6分で切り抜け(弾幕射撃や高射砲のVT信管の射撃もあるが)、機関砲等の有効射程を500米とすれば、これも5秒で突破して、敵は体当たりされる訳である。もっともここまで、敵機の警戒網を逃れ、目標の上空まで来るのが大変なのだが。久保田数字は、突入諸元は最終時速400キロ故、1割の相違があるが、概略の計算でご勘弁いただきたい。こんな可能性もあったのだと嬉しい。

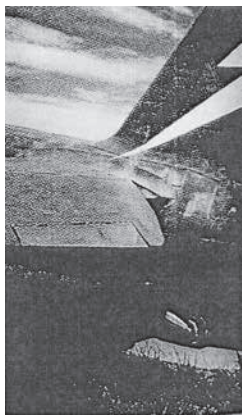
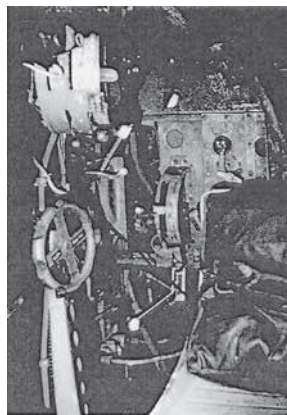
昔の飛行時間150時間以下の「ヒナ鷲特攻」の、戦後70年近い現在の術懐である。あの世で同期生に会ったら、

この話をしてやりたい。

次の写真は、潮書房・光人社の『決

戦闘機 疾風』から拝借したもの。

左は四式戦尾部の昇降舵とタブ
右は操縦席内のレバー(上)と、丸に十の字のタブ操作輪(下)である。



「極秘」飛行機教程別冊「キ84」操縦法 明飛配付200部の内193号・昭和20年2月8日

(寄贈)平成5年7月15日・及川修次・府立四中・航士53期・第200戦隊整備隊長

目次 タブの項目のみ抜粋

平成26年7月9日

今回の提供者 堀山久生(府

立四中・陸士57期・第194振武隊長・館林)

総則

第一 本機はその性能發揮の為各部の構造巧緻にして且巧妙なる条件の下に作動をするもの少なからざるを以て操縦者は本機の構造機能及取扱に精通しその特性を十二分に把握し周到合理的なる操縦により本機の全性能を遺憾なく發揮すると共に飛行機愛護の精神を堅持しあるを要す

第二 従来動もすれば未修飛行教育に於いて単に飛行し得る程度のみにて自他共に操縦を心得たりとの観念を有せるは大なる過誤にして構造機能及び取扱に精通し得て始めて完全なる操縦を行い得るものなるを以て操縦比較的内容なる本機の未修教育に在りては地上、空中に於ける取扱に教育の重点を指向するを要す

○タブの項目のみ抜粋

第一〇 尾翼 昇降舵は金属骨組羽布張りにて金属製「タブ」を有す尚重量は前縁部重錘にて完全に平衡す

方向舵も亦金属骨組羽布張りにして下方前縁部平衡重錘あり尚後縁に修正片を有す

第一八 操縦装置 操縦装置は三舵操縦、昇降舵「タブ」操作及び下げ翼操作の三装置より成る操作系統は昇降

舵、方向舵、「タブ」及び下げ翼は主として特殊鋼索を用い補助索は運動桿に依る 各操縦部及び操縦面の運動範圍左表の如し

操縦面	昇降舵「タブ」
操作部	操作転把
操作	前回転4・9回
操作角	下12度
操作	後回転4・9回
操作角	上12度

摘要・1回転
約2・5度

第二七 「タブ」の操作法左の如し

- 1 機首上げの場合は転把を左回転す
- 2 機首下げの場合は転把を右回転す
- 3 転把1回転に対する「タブ」の操作角は約2・5度なり
- 4 「タブ」使用の基準概ね左の如し
(注・実際の使用は、「タブ」は操縦席左レバーの手前に縦方向に付いており、機首上げは転把を手前(左回転)に軽く回し、機首下げは転把を前方(右回転)に軽く回せば良い)

關戰	巡航	着陸時	離陸時	
			重量・Kg	重心・%
勉めて5度以内に下げ	手放し飛行の出来る如く適當に使用する	3767	3300	訓練時
			3400	26・4
			3900	26・6
			0度	「タブ」使用角度基準
		26・6	26・1	
		3900	29・4	
		3767	29・0	
		3767	29・0	

5 「タブ」の操作は掌に依り摩擦する如く迅速に使用するを要する

空戦時に於いては特に然り

第六八 急激なる引起し、急降下を行いたるときは左記箇所を点検すべし

1 操縦系統、舵面、特に昇降舵「タブ」

第七六 地上滑走開始前操縦者は離陸位置に於ける諸操作を簡單にし且過誤なからしむ為調整及び点検を行うべし

5 昇降舵「タブ」の規正

第七九 着陸に方り操作すべき事項左の如し

- 2 下げ翼下げ 下げ翼30度開けば機首下げ大となるを以て「タブ」を適

宜使用すべし

第八二 着陸復行に方り注意すべき事項左の如し

3 「タブ」を零とす

第八五 水平飛行 巡航時

8 「タブ」を規正する方向舵は足放し飛行を為し得る如く修正しあるを要す

17 本機の満載装備時に於ける失速計器速度左表の如し

高度 (米)	失速計器速度 (キロ/時)	下げ翼 (度)	脚	昇降舵「タブ」	回転数
2000	165	0	上げ	0	1200
2000	149	15	上げ	0	1100
2000	139	30	上げ	+2	
2000	168	0	下げ	0	1200
2000	163	15	下げ	+2	1100
2000	138	30	下げ	+4	1000

第八七 特殊飛行

- 1 本機は各種特殊飛行を容易に実施得て悪癖なし

7 昇降舵「タブ」は急(垂直)降下を除き巡航の儘行うべし

18 急降下を実施するに方り昇降舵「タブ」を過度に使用すべからず而して操縦桿の押さえは速度に比例し降下角に反比例して重くなるも特に必要な場合を除き昇降舵「タブ」は下げ5度以内なるを要す

注意 3 昇降舵「タブ」は搭乗前嚴に自ら点検を要す (終わり)

満洲国と敗戦による引揚げ時の思い出

会員 濱田 隆人

小生は、昭和12年10月20日の生まれで、場所は父の勤務する「満鉄」の大石橋病院、年齢的に第二次世界大戦を知る最後の年代である。暇に焼き付いて、終生忘れることのできない、悲しく辛い、そして泣けてくる懐かしい思い出を、二度と許すまじき戦争と、平和を切に願う心で綴ってみる。

歴史から埋没されかかっている「満洲国」の建国は、決して日本の領土としようとしたのではない。満洲は元々満人の祖国で、そこに日本人、漢民族、朝鮮人、蒙古人が入ってきて一緒に住んでいたのであるが、治安が悪く安心して生活できない。それ故、日本が匪賊を討伐して「満洲国」という独立国が出来て、清朝最後の皇帝・宣統帝（明治45年2月12日、辛亥革命により退位、当時5歳）「溥儀」が皇帝となって、昭和天皇とも対等の立場で拜謁を賜っている。その時期は、日本も「日清」「日露」の両戦役で世界が注目するようになり、列強各国に倣い、産業振興を図り、経済発展に努め、いわゆる植民地政策を大々的に展開し、日本民族の生

命線の確保に邁進していた明治の終期である。

この時勢の波に乗って発展してきたのが父の勤務していた「南満洲鉄道株式会社」（通称「満鉄」）という日本の国策会社であり、後述する一大コンチェルンである。

当時国内では、不景気による閉塞感に満ちた状況にあったが、「満鉄」は日本国内の企業が国内の諸事情に縛られ、活動が窮屈であったのと違い、満洲という国外の、しかも特殊法人として明治39年に設立され、自由に企業活動が可能な状況にあった。

本業の鉄道事業を中心として、関連する幾多の事業（経済、産業、民生等の調査並びに資源調査等）を起こし、新規の職場の提供、職員、工員の採用が盛んに行われていたのであった。このようにして「満鉄」は、日本の政策を支え、盛り立てるものとして大きな役割を果たしていたのである。言うなれば、満洲全土を総合的に調べ上げる機関として設置されたのである。

年と共に業容も拡大され、その機能も規模も拡大され、確固たる地位を築いていったのである。当初は、鉄道線路沿いの10km毎に守備隊を置かなければならないほど治安が悪かった。この守備隊がやがて、関東軍と言われる強

大な権力を持った組織体となり、遂に「満洲事変」を引き起こし、戦争行為を展開していく。そして、関東軍は、満洲の経営に、「満鉄」の経営にと、深く関わってくるのであった。

この時期（昭和7年）、父は満洲国国立建國大学を卒業して「満鉄」に入社したのである。私が父を語るのも恐縮であるが、当時のいわゆるエリートである。恐らく父は、未開の大地、夢溢れる新天地で、人生の夢を託せる満洲、そして「満鉄」で、命を懸けて働き、青年特有の愛国心に燃えていたはずである。

小生が大学生の時に、一つの教訓又は生きた歴史の指導の意味だろうか、父は、次の二つの事を強く語ったのである。即ち、①戦いには敗れたが、東洋の平和と安寧を求め、大東亜共栄圏を構築しようとする思考が日本の底流にあり、それが日本人の世界観であって、日本人は誠に誇りある偉大な民族である。②天皇中心の政治体制の構築が絶対であり（天皇は元首の意味）、

列強に虐げられ搾取されている東洋民族の解放、特にインド、ビルマ（現ミャンマー）フィリピン、インドネシア等の解放に対する考え方を「満鉄」に私見として提案した。即ち、日本は第二次世界大戦を契機として、18世紀の産

業革命以来、ヨーロッパの列強諸国によって抑圧制覇されてきた未開発、低開発の諸国の「解放闘争」「独立運動」の嚆矢となったのである。

東南アジア諸国へと戦線を拡大していった事が、結果的に、これまで植民地として虐げられてきた状態から脱却して、独立しようとしていた現地の人々の心に「火」を点したのではなかったか。独立は東南アジア諸国に限らず、その影響により、中近東、アフリカ、中南米の諸国が次々と独立していったのである、と父は語ってくれたのである。前述のような壮大な夢や希望に胸をふくらませ、自分でも同調できる現実的な目標としてその実現に、単に思い又は提案ではなくて、邁進して行ったのであろう。

そして、志半ばとなり、敗戦によって最後まではなし得なかつたのであるが、兎に角やってみて、その芽は出たぞという思いは、幾らかあつたはずである。今になって思い返してみるとき、当時の父の言葉の端々から感じられることだが、戦いには負けたが、「やつたぞ」という、ひそかな達成感を持っていたのではないだろうか、父の誇りに掛けてそう思いたいのだが。（日本の国威高揚に貢献したのだと自覚していたのだろうか。）

やがて残念ながら敗戦となる。太平洋戦争とも称されるのであるが、三国同盟により大半の世界の先進国と戦って勝利と戦果を誇ったのであるが、それはいつまでも続かない。世界史は戦史であるとの事からは逃げられない。

昭和20年8月15日には、昭和天皇の「玉音放送」があつて敗戦になったのである。日本が有史以来、初めて戦争に破れ、しかも未曾有の大戦に敗れたのである。

我々家族5名(父母、私、妹二人)は、その放送により、父は呆然自失、母は泣き崩れ、小生は何が何だか全く分からないで、馬鹿のよう、妹二人は母が泣いたので一緒にわんわんと泣いたのである。

戦勝国のロシア人(特に軍人)、中華民国人の日本人に対する凄まじい報復が始まったのである。小生は子供ながらこの険にはつきりと残っている。戦争中、日本人は特に中国人(中華民国人と現政権の中華人民共和国人を総称して中国人と称する。)には、「東洋鬼」と言われ、恐怖と軽蔑の複雑な目で見られていた。敗戦によるその反動である。ロシア人(特に軍人)は囚人兵であり、民度は低く、乱暴狼藉は当たり前、敗戦国民である我々の家に土足で上がって、マンドリン銃で脅しな

がら何もかも奪っていくのである。何か言えば、その銃で殴る、又は足で蹴るのである。日ソ中立条約を一方的に破棄し、8月9日に、20万人の戦車を伴う大部隊で侵略した。その強欲さ、不誠実さは許し難い。我が家の愛犬・太郎は、土足で家中を荒らし回るロシア兵に大きな声で吠えるので、銃で撃たれて殺される。小生は血で染まった愛犬を抱いて大声で泣いたのである。その兵隊に殴りかかっていこうとしたが、父に止められ、大声で泣くのがせめてもの抵抗であつたのだろうか。今思い出しても悔しくて腹立たしい。

戦時中、多数の日本人(特に関東軍)が、中国人に対して、大した問題でもないのに、迫害、略奪、暴行等は日常的で、衆人の中で平気で大声を出して、その無体なことをしたのである。小生を連れた父が通りがかりにその乱暴さに対し、仲裁すれば、父までも殴られ、蹴られる醜態である。それを必ず中国人の子供が、自分の父が理不尽に日本人に無理難題を押し付けられ、それを対処できないで辱めを受けているのを、泣きながら恨めしげに見ているのである。それは何時までたつても忘れられない。そしてその恨みを「東洋鬼」としてその子供に伝えていくのである。何時までたつてもそれは忘れない。

前述のように東南アジアでは、先進ヨーロッパの植民地での解放運動をしたので、今でも親日国家が多いが、中国では統治の方法が根本的に間違っていたのであろうか。険に焼き付いているので、最近の「尖閣諸島」問題を新聞、テレビのニュースに触れる度に小生は日本人として恥ずかしいと思うのである。「東洋鬼」と言われて論述したように、当たり前のことである。やつた方はすぐ忘れるが、やられた方は針小棒大に解釈し、立腹と悲しみをもって語り続けるのである。小生は大変恐縮であるが、日本人の一人として、その謝罪の意味と、相互に往来し、貿易も相当量しており、友好的でなければならぬので、その願いを含め、過去20年間毎年、靖國神社に参拝しているのである。

結局、戦争は許すまじき事であり、特に敗戦国民が如何に「悲しく」「切なく」「飢餓」と「病氣」に苦しめられ、そして最後に我が命を守るには、自分たち自身でなくて、戦勝国の冷酷な(余り当てにならない)心情次第である。戦いに敗れるのは余りにも情けないが、その思い出を、険を閉じて辛く悲しく涙を浮かべながら、次のように①「敗戦時」②「引揚げ時」③「引揚げ船中」④「引揚げ後」等に区分しながら

①「敗戦時」
ア 前述のように、父は満洲国においてエリートであつたが、終戦によりすべて灰燼となる。「満鉄」での父は「孟家屯駅長」であつた。当時の首都は「新京」(現在は「長春」)である。孟家屯の郊外には関東軍最大の兵站基地があり、ソ連との国境に近く、軍隊の町であつた。官舎には軍人が多数出入りしていたし、満人(中国人)の武道家、遊説家、俠客(得体が知れなくて母は嫌っていたが)も頻繁に出入りしていたが、父は世話好きでお人好しだったので、恐らく小遣い稼ぎが目的であつたのであろう。官舎はお城のよう

に広くて、駅長付きの秘書の宮城辰治氏(故人)が常駐し、家族は5人であつたのに女中さんが二人もいたし、室内には豪華な調度品、武器、絵画等があり、最高の生活状態であつたのであるが、「玉音放送」ですべて終わり。駅長官舎はソ連軍に接収され、我々一家は、かつての物置に強制的に追いやられたのである。敗戦国民の半自給自足の生活が始まったのである。幸いにも「円」は通用したのである。しかし、一瞬にして難民生活である。しかし「情けは人の為ならず」

である。自分の両親の自慢を語るのは恐縮であるが、中国人の女中さん達を可愛がったのであろうか、例えば、食事は家族と一緒に食べ、一緒に三時のおやつも食べていたのである。また、両親の着古した衣類、食品の余り物、家の調度品の交換時などには、古い物を分け与えたりしていたのである。彼女らはそれを非常に感謝していたはずである。それ故に、我が家が日本に引き揚げるまで、食料や薬、新聞等を持って来てくれたのである。日本人の家に女中として働きに行くのだから、彼女らの生活が豊かだとは思えない。否、貧しいのである。しかし、戦争中の我が家は非常に豊かだった。母が彼女らに施したのは、些細なことである。しかし、有り難いことに、彼女らはそれに恩義を感じてくれていたのである。物置に住む旧主に、貧しい家計から金銭を捻出して、前述の食料や薬（日本人には「東洋鬼」だということ、生活必需品は売ってくれず、売るとしても不当な高値であった。それくらいに日本人は憎まれ嫌われていたのである。）をこつそり（そんなことをすれば、仲間の中国人にリンチを受ける。）持って来てくれた。それによって我が家の家族は命を長らえたのである。今、「日中」は誤解と中傷で不仲である。その

理由は別として、本当は中国人は「恩義」には「恩義」を以て報いる、非常に誇り高き民族ではなからうか。69年前であるが、彼らは情の深い、かつ誇りに満ちた偉大な方々であったと感謝しているし、忘却することはできない。ウ 残念ながら前記いと反対のも記さなければならぬ。中国人は、かつて駅長であった父に無理難題を要求（例えば、かつて日本人の駅員に痛めつけられたことに対する慰謝料の要求、薬の高値での買い取り（殆どインチキ品）の強要、武装解除後の銃剣類の更なる行方を白状せよとの強要（まだ未提供品があると思っただであろうか）等）、また、日本人宅へ侵入しての強奪等、枚挙にいとまがないくらいであって、戦争に負けた惨めさをいやというほど味わわされたのである。これが、中国人の日本人に対する復讐のためなのか、又は経済的な貧しさのためなのか、小生には理解できない。敗戦国民を、過去に如何なる憎しみがあろうとも、今は敗戦で難民状態なのに更に鞭打つのかと怒りが先に立つ。

エ 小生は、渋谷のロシア料理「ロゴスキー」を現在も愛用している。ソ連軍が、日ソ中立条約を破棄して、8月9日に満洲に侵入して来たのは、国際法違反との評価があるが、戦勝国としての国益の問題で勝利側につくのは当然であると思料しているのは、許されないであろうか。子供であった小生は、ソ連の軍隊によく遊びに行き、日本の歌を歌って仲良しになり、その帰りに黒パンを貰ったのである。今は「黒パン」「ヴォルシチ」「ピロシチ」「ロシア紅茶」等を仲間とロゴスキーで食べていて美味し。だが、その時は黒パンだけであり、飢えを凌ぐ手段だったので、美味しいとは思わなかった。両親は食べなかつたし、父は悲しそうに見ていた。否、泣いていたのかも知れない。敵の情けは受けられないという日本男子の面子の故か。

オ 敗戦国民は病気になるでも、怪我をしても満足に医師に診察してもらえないし、薬は殆ど売っていない。医師は敗戦と同時に、ソ連軍と中国軍に拉致され、薬は前述のとおり、闇の不当販売である。我々は極度の栄養失調になり、健康不良となって、老人子供は残念ながら死んでいくのである。小生の下の妹の美美子も5歳で、急性肺炎のため死亡した。

カ 日本の敗戦とともに、今まで日本を共通の敵として戦っていた中華民国軍（蒋介石軍）と中華人民共和国軍（毛沢東軍）が一時休戦であったが、日本の敗戦によって再び両軍が内戦となったのである。目的は首都「新京」の争奪である。両軍は一進一退であったが、我々民間人はその戦いの被害者となる。それよりも辛いのは、その軍隊の中に旧日本兵が中国兵として編入されていたのである。そしてその日本兵は、駅長である父を訪ねて、一通の手紙を涙ながらに託すのである。その手紙を日本の自分の妻子に届けてもらいたいとのことである。内容は推量であるが、「無事である。中国兵として頑張っているので、安心してもらいたい。中国が平和になれば、なるべく早く日本に帰る。」という内容でしょうか。父はそんな日本兵の手紙を何十通も預かったようである。日本に帰ってそれを各々の妻子に届けるのも父の使命（同胞愛）だったのでしよう。

引き揚げるまでの出来事や思い出は鮮明に焼き付いているが、紙面の都合によりこれで終わり、引揚げ時の記憶にペンを執るとすれば、取り敢えず、中国（満洲）を出港するまでの引揚げ時の思い出を記す。

②「引揚げ時」

ア その日は昭和21年7月2日、孟家屯地区（駅、官庁、旧日本兵、開拓移民）総人数約2千人（すべて父の日誌にて確認）一つの団体としての引揚

げであるが、満鉄が世話役だったのである。軍隊のように整然と統制が取られていたのではなく、地位も名誉も捨て去り、そして最後に最も大切な、生きる勇氣や希望もなのまま（日本がど

んな状態かも全然分らない、親類一族等が空爆で生死も分らないので、当然ではあるが）での、リュックサック一つ背負つての半病人のトポトポとした歩みである。一種の難民の移動である。歩いたり、貨物列車に乗ったり

である。戦争中は豪華な客車に日本人は乗っていたのであるが、栄枯盛衰は世の常と言えども寂しい限りである。怒りは誰に向けるべきか。しかし、その中で一つの救いは、旧日本兵は常に、病人、老人、子供を労りながら、リュックサックを持ってあげたり、貨物列車に優先的に乗せてあげたりして

いて、子供ながら生意気にも感心し、日本に帰って今思い出す都度、矢張り日本の軍人は立派だなあと、その誇りを他人に語っているのである。それが人知れず嬉しい。そして悲しい。

イ 葫蘆島港に向かつての帰途である。大連（満鉄の本社の所在地）の米軍の援助と中華民国の協力の下において、引揚者はこの港に集結し、日本に帰るのである。そして、生涯忘れられない港、何故ならば、満洲からの最後

の引揚げ地であり、この地に、引揚げのスタートから葫蘆島港間で亡くなられた方数千人が周囲の山に埋葬されている場所だからである。

ウ 貨物列車に乗らない時は徒歩で各拠点まで行って収容されるのであるが、食料の不足、病人、怪我等に悩まされ、それに加えて残念ながら、半健康体でも伝染病が発生した場合、菌が撲滅されるまで逗留とされるのである。そして死体は、当時は土葬が認められていたが、簡単な火葬で伝染病菌と共に焼いたのである。

エ その収容所にいる間に、我が子を中国人に預けるケースもある。その場合、3歳以下の子に限られる。その歳ならば、親の区別が付かないからである。我が子を渡すのは、食料を分けてもらおうケースもあれば、子供が病気の

場合、それを直してもらおうケースもある。いずれにしてもお互いが生きるための悲しい決断である。それが「中国残留孤児」である。しかし、小生の救いは、中国人は、引揚者としての日本人の子供を自家の下男、下女として預かる（又は買い取る）のではなく、自家の後継者として引き受けたからである。それが証拠に、国交が回復されて「中国残留孤児」の日本の肉親探し

ト職であったのである。医者、教師、事業家等であったし、幸いにして日本の肉親に会えた方は、双方抱き合せて涙したのである。中国人の養父、養母等は彼らを大切に、可愛がったのであろう。大半の孤児が中国に帰ったことが、そのことを何よりも証明している。中国で幸福に結婚をし、子供も生まれ、エリートとして社会の責任者としての立場もあつたからである。ここにも中国人の大人たるゆえんがある。日本人の一人として深謝する次第である。

オ 敗戦になるとその地域全体は無警察状態となる。いわゆる無法地帯である。法律は通用しないし、秩序は乱れ、戦勝国の良心、道義の中でしか、悲しいかな当時の日本人は生きる術はないのである。中国人、ソ連人に銃剣を突きつけられるのも辛い、飢えと戦うのも耐えられない。しかし、前述のように「生きる勇氣、希望を失うのはすべてを失うことである」と、父は仲間を勇氣付けていた。父はその時わずか33歳であるが、引揚げ中は、孟家屯駅とその関係者に大きな声で励ましていたのである。また、ソ連人、中心は中国人であるが、武装解除が終わっているにも拘わらず「まだ武器を持っているものは出せ」「金銀財宝類は直ち

に出せ」、そして「身体検査をして発見すれば、この引揚げ団は、罰として拘束し、日本には帰さない」と怒鳴っていたのである。それに対して父は、何も無いと答え、身体検査で仮に発見されたら、それを与えるように、それでも承知しなかったら駅長に言うように、と大声で言っていた（中国人には日本語は分からないので都合が良かった）。発見されると、それを与えるくらいでは承知しないで、無理難題を言ってくるので、父は、無理難題を言っても、それが正規の中華民国の役人ではなく、日本で言えば、暴力団の地廻り、代貸し等（いわゆるチンピラ）で父にすれば怖くない。大きな図体で睨めば彼らは退散する。その時に引揚者の方々は父を見直したかも知れない。父の武道の胆力が危機を救ったのである。

カ 半自給自足と言ったが、我々は飢えのためには何でも食べた。それ故に今でも好き嫌いは殆どないし、食べられるのを感謝している。徒歩中ならば、木の葉、道端の草、仮収容所にいる時には、中国人の家で乞食のように御馳走になったりして、生命を辛うじて保つたのである。恥も外聞もない、生きるためである。

キ 満洲国について述べる際に、省

キ 満洲国について述べる際に、省

略できない秘話の一つが「満洲開拓移民」である。「満洲開拓移民」とは、昭和の初期、陸軍と拓務省で推進した満洲への日本人農業移民ポリシーである。これには二つの役割がある。一つは関東軍の政治的、軍事的要請である。人数増加を願望し、対ソ防衛のための後方兵力としての役割、二つ目は昭和恐慌で経済的に困窮する日本農村、農民の救済方法(過剰人口対策)であり、約40万人が移民、敗戦直前の8月9日、ソ連軍が突如、満洲国に侵入、それにより同開拓団の崩壊が始まる。関東軍は開拓団の男子を大半召集したので、多くの開拓団は、老人、婦人、子供だけとなる。同時に、弱い彼らに中国人農民による無情な報復も始まったようである。関東軍に置き去りにされた開拓移民は、逃げることもできないと、哀れにも判断し、集団自決を選択せざるを得ないのであった。約8万人。本問題を史料する際に、幾多の困難や矛盾の中で幸福を求め、時の政策で命を失った人々の声を聴くべきである、との歴史を強調したのである。

満洲開拓移民のケースは、二度と繰り返してはならない悲しい歴史である。私見で恐縮であるが、このような歴史を深く、そして謙虚に学ぶことを通じて、我々は、政策、行政、コミュニティの本来の在り方を思索する重要なヒントになる筈である。歴史を学べである。さて、最後になるが、「葫蘆島港」よりの引揚げ船に乗って日本に向かうその船の中の思い出を記したのであるが、乗船者約千人。

③「引揚げ船中」

ア 同港を出港すれば日本に向かうのである。我々は博多湾を目指したのである。貨物船である。鮪のように商品倉庫に並んで寝るのである。自由になるのは甲板だけである。ギッシリと詰まっている。食事は日本から「さつまいも」「かぼちゃ」とうもろこし「麦御飯」等であり、有り難かったのであるが、量は少なかったもので、内地も食糧難だなど父が語っていたのを今でも胸をえぐるように思出す。長い難民生活だったので、全員疲労困憊である。衰弱している。その上に不衛生である。水は殆ど使用不能。伝染病が多発して、毎日のように死人が出る。医師はいないし、薬はないし、当然のことであるが、全て水葬である。その都度、我々は甲板に集められて、船長又はお坊様の弔辞があり、板に載せて、白い布で包んだ遺体を海に捧げるのである。そして、船は3回左回りして死者の冥福を祈るのである。遺族は泣き崩れる。それが毎日何回となく繰り返される。

生き地獄である。人の命はもつと尊いのであるが。

イ 博多湾に着いても、伝染病が船内で発生しているので上陸できない。歓迎の小舟が毎日何十隻も来てくれるが上陸できない。日本に帰って来たんだと喜んでも、伝染病患者が多数いたし、我々も保菌者の可能性あり、その菌が撲滅するまで上陸できない。約10日間、船内に逗留させられた。

しかし、完全に撲滅したのではないが、死人が減ったのを頃合いとして下船命令が出て、下船したのであるが、御存じの白い粉「DDT」を持ち物全部と全身に浴びせられたのである。

苦しんで共に励まし合った仲間と別れの時が来た。それは8月29日であった。約60日掛かっていた引揚げである。戦時中ならば、約3日間の旅なのであるが、兎に角、日本に生きて帰って来たのである。仲間達(父母のことであるが)とは再会を約し、帰省先を各々メモで交換し、別れたのである。

ここで引揚げまでの思い出のペンを置くが、本当はこれからが大変なのであるが、又のチャンスにペンを執らせていただきたいのである。

簡単に論述させていたくならば、終戦を迎えて、日本全体が混乱の中にあった時代以後「民主主義」とか「自

由主義」とかで、日本中が大変革を遂げ、世の中が大きく変わってしまった。

新憲法が施行され(1947年)新しく教育基本法が実施され(1947年)民法の改正が行われ(1950年)、明治以来これまでの日本社会を支えて来た日本人の道徳律や倫理観をも変えてしまい、それこそ父達が想像もしなかつた世界が開かれてきた。我々はその大変革の時代から人生の第一歩を踏み出したのである。

書き終えたのであるが、次の言葉が小生の真の気持ちである。

「我々を育み、大きな夢と希望を日本に与えし大地『満洲』よ、その大地で、日本と中国が永久に友好であれかし、栄えあれと折り、支え合い、助け合い、抱き合いたし」

以上

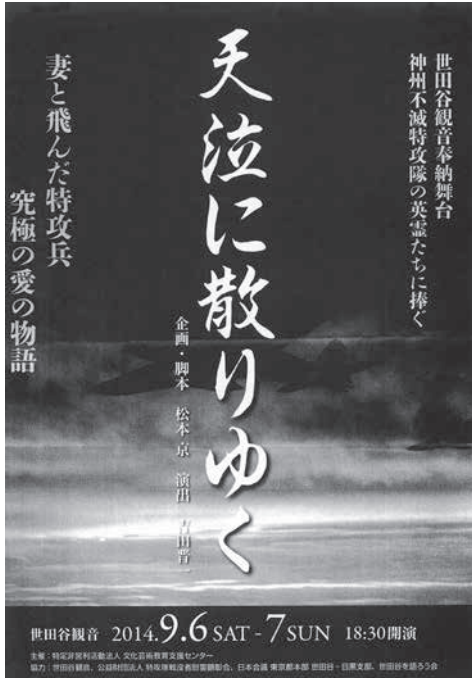
世田谷観音文芸祭と奉納舞台演劇
神州不滅特攻隊の英霊たちに捧ぐ

「天泣に散りゆく」

—妻と飛んだ特攻兵

究極の愛の物語—

平成26年9月6日(土)及び7日(日)の2日間、世田谷山観音寺境内において、初の「世田谷観音文芸祭」が催行された。主催は特定非営利活動法人(NPO法人)文化芸術教育支援センター、これに世田谷山観音寺、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会、日本会議東京本部、同世田谷・目黒支部、世田谷を語ろう会の協力によるものである。「世田谷観音文芸祭」は、昼の部と



夜の部に分けて催行された。昼の部は、地元の各種文化サークルの競演により、バンド演奏、詩吟、剣舞、和太鼓など様々なパフォーマンスが行われ、盛んな拍手・声援が送られた。夜の部は、奉納舞台劇「天泣に散りゆく」である。この舞台劇は、企画・脚本 松本京、演出 吉田晋一、舞台監督 齋藤英明、出演者は、即興演劇集団FERRECUZ、カムカムキーナ、劇団K助他多くの劇団所属俳優に、早稲田大学演劇部や地元桜丘高校演劇部の皆さんを加えた四、五十名に及ぶ多数である。この舞台は、チラシにも「神州不滅特攻隊の英霊たちに捧ぐ」とあるように、世田谷山観音寺の特攻観音堂脇にある「神州不滅特別攻撃隊之碑」

に刻まれている同特攻隊員に關わる秘話を基に書かれた、豊田正義著『妻と飛んだ特攻兵—8・19満州最後の特攻—』(角川書店発行)の史実を元にしたフィクション

ン。終戦から特攻までの4日間を描いた、夫婦の愛と葛藤の感動秘話。その粗筋は、「昭和20年8月15日、満州大虎山分屯基地の飛行兵たちは、一方的に日ソ不可侵条約を破棄し、侵略するソ連兵に対抗すべく命令を待っていた。しかし、偵察隊が帰還し、ソ連軍の民間人に対する殺戮の報告を聞いたその時、終戦の一報が届く。信じられない出来事に、ある者は泣き叫び、ある者は憤慨し、そしてある者は自害した。敗戦・・・受け入れられない現実を誰もが疑った。そんな中、何とか逃げ込んできた民間人たちによってソ連軍の非情な殺戮が終戦後も続いていることを知る。天野茂以下10名の飛行兵たちは、民間人を守るため特攻の決断を下す。天野は妻、夕子に悟られないように計画を進めていたが、夕子はすべて見抜いていた。そして、天野と一緒に飛びたいと胸の内を打ち明ける夕子。生きろという天野。二人の運命は、そして飛行兵たちの最後は・・・とある。

前記の特攻観音堂とその傍らの「神州不滅特別攻撃隊之碑」が在る、この世田谷山観音寺境内で、このような舞台演劇が上演、奉納されるということ、誠に意義深いことである。筆者が観劇に訪れた9月6日(土)は、曇り

空で、夕方から雨の予報であったが、主催者側でも野外演劇であるだけに、しかも、季節的に雨の多い時期であるため、そのことを考慮して予め、「雨天中止の場合は、チケット代金に代えて奉納舞台を納めたDVDと特攻観音の『絆・お守り』をチケット購入者にお送りする、今は亡き英霊の方々に舞台を奉納するので、その趣旨をご理解の上、チケットを購入された」とのことであった。幸い、開演時間の18時30分になっても雨は降らず、予定どおり開演となった。ところが、開演後30分頃からポツリ、ポツリと降り始め、小雨模様となったが、劇はそのまま続けられた。しかし、大方は小雨決行を予想してか、雨合羽などを用意していたようで、三百名を超える満席の観客の中で席を立つ者は殆どいなかった。出演者と観客の熱心さに応えて、後半は雨も止んだ。これも英霊の御加護であるうか、それともこの雨は、題名どおりの「天泣」であったのかも知れない。そう思いたいような不思議な現象でもあった。あたかも出演者の熱演に應えるかのように天から涙雨が降り落ちたのである。

この劇は、世田谷山観音寺本堂前に設けられた特設舞台のみならず、周辺の木立や参道も使用し、劇中に取り込



神州不滅特別攻撃隊之碑



世田谷観音文芸祭



谷藤徹夫中尉の姪・左から吉田ひろみさん、小原真知子さん、鮫島美知子さん



同上文芸祭・和太鼓の熱演

祖国の敗戦と云う結果で終末を遂げたのであるが、終戦後の八月十九日午後二時、当時満洲派遣第一六六七五部隊（第五練習飛行隊）に所属した今田達夫少尉以下十名の青年将校が、国敗れて山河なし生きてかひなき生命なら死して護国の鬼たらむと又大切な武器である飛行機をソ連軍に引渡すのを潔しとせず、谷藤少尉の如きは結婚間もない新妻を後に乗せて、前日二宮准尉の偵察した赤峰附近に進駐し来るソ連戦車群に向けて大虎山飛行場を発進、前記戦車群に体当たり全員自爆を遂げたもので、その自己犠牲の精神こそ崇高にして永遠なるものなり。此処に此の壮

んでの演出で、観客席も野外の椅子席であるだけに、熱演を間近に観ることができ、観客も劇中に引き込まれるような感じがして、むしろ良かったのではないかと思う。野外演劇の一つの在り様を示したとも言える。また、脚本・演出もフィクションながら、殊更に誇張されたり、歪曲されたりすることもなく、史実に沿って淡々と演じられたのも好感が持てた。何よりも雨天中止とならず、小雨決行で「天泣」を体感できたのは良かった。

◇ ○「神州不滅特別攻撃隊之碑」碑文

「第二次大戦も昭和二十年八月十五日

拳を顕彰する為記念碑を建立し、英霊の御霊よ永久に安かれと祈るものなり

- | | | |
|----|-------|-----|
| 中尉 | 今田 達夫 | 広島 |
| 中尉 | 馬場伊与次 | 山形 |
| 中尉 | 岩佐 輝夫 | 北海道 |
| 中尉 | 大倉 巖 | 北海道 |
| 中尉 | 谷藤 徹夫 | 青森 |
| 中尉 | 北島 幸次 | 東京 |
| 中尉 | 宮川 進次 | 東京 |
| 中尉 | 日野 敏一 | 兵庫 |
| 中尉 | 波多野五男 | 広島 |
| 少尉 | 二ノ官 清 | 静岡 |

昭和四十二年五月

神州不滅特別攻撃隊顕彰会建之

(注) 階級は戦死確定後のもの



航空将校を訓練する教官を目指し習い事を受けた藤徹夫 (21歳時)

平成25年6月15日初版発行
 著者 豊田 正義 (とよだ まさよし)
 発行者 井上伸一郎
 発行所 株式会社角川書店
 発売元 株式会社角川グループホールディングス
 〒102-8177
 東京都千代田区富士見2-13-13
 電話 03-32238-8521

《読者の声①》

真正な日本人の懐中メモ

会員 石田 一 (陸士57期)

○戦後の教育現場では天皇について教えない。天皇に無関心な若者を世に送り出している。

○戦争を知らない戦後世代にとつて、天皇の存在意義は殆ど何もないであろう。単に長い伝統を継承しただけで、シンボルとしての天皇がなくても民主主義国家は成り立つと考えている。

○皇室は不動である。その故に天皇陛下を仰げば現在の日本は昨日と比べてどう変わったか、どの方向に変わりつつあるかも分かる。日本文明のバロメーターが天皇である。北辰を指す磁針の如くである。

○日本には究極の存在、天皇がおおいでになるといふ安心感がある。

○天皇の祭祀は、天皇の属性である。国家国民はこれを大切に擁護する義務を持つ。憲法はこの国民の義務を定めている。

○昭和天皇は天性澄んだお方であり、日本神話の心そのもので貫かれています。

○天皇の基本的特質の一つは、無私である。

○東北の被災地の避難所にて、陛下のお姿を見た人が、どちらかというところ「天皇なんかなくてもいい」と思っていたが、天皇が存在することが、どんなにか有り難いかを、肌身で知ったという。

○日本の天皇は、西洋の文化人類学者の言う「神聖な首長」である。

○街に数多の日本に関する著書が並ぶが、それらの日本論は大方、天皇について触れていない。天皇を語らずして日本を語るはずがない。

○日本の伝統芸能の歴史を緋けば、すべて皇室に辿り着く。

○時代の流れいろいろの中で、変わらぬものは、君臣一体の姿である。事ある時に直、日本人が一つになれること、それは天皇の存在あつてのこと。

○まつろふ、まつろいといつて、彼より徳を慕い、風を望んで来るのを待つ、これが世界の平和統一という天皇の使命。

○日本の祝日は全部、皇室と繋がっていた。日本人は皇室との繋がりを大切にしていた。

○皇居の宮中三殿(賢所、皇靈殿、神殿)で行われる宮中祭祀は、建国以来、天皇が神事を最優先にしてきた伝統である。

○森羅万象は悉く宇宙に含み包まれて

いるもので、宇宙と対立しない。宇宙は絶対である。何ら対立するものはない。絶対の中の相対である。天皇は絶対で、天皇と国民は対立しない。一君万民である。一君中の万民で臣下である。

○神だ、あれだけの試練を受けて尚、帝位を維持しているのは、神でなければできない(東京裁判のW・ウエップ裁判長)。

○敵将マッカーサーをして「我、正に神を視たり」とまで感動させた。

○もしも世界に皇室や王室がなかったら、人々は今よりも粗暴で倫理観に乏しく、ずっと我が儘であつたに違いな。治安は乱れ、文化性に乏しく、無味乾燥な社会になっていただろう。權威としての帝や王は文明そのものである。

○この国を取り巻く内外の情勢は、つまるところ、日本とは何か、日本人の本質とは何かということ、一人でも多くの日本人が考えて気付くことによつてしか克服できないというような問題が押し寄せてきている。

○古代の先祖は、感性が澄み、直感が冴えていた。そのため、人間の生存における最要最勝の真理を直感で感じ取り、代々語り伝えたのである。

○占領政策は、日本の国の根の日本神

話を消した。日本の混迷、日本人の不幸を醸成する原因はここにあり。

○西洋は法で治め、日本は目に見えぬ神を祭る、恐れ慎む心で国を治める、祭政一致の国柄である。

○万世一系の天皇を戴いていることが、今日の日本をあらしめたのである(アインシュタイン)。

○日本文化のエッセンスとも言うべき「無我」、この「無我の境地」といった心境は、自我の確立を大前提としている西欧の人達には理解し難いものである。

○日本は、一国で一つの文明を築いているとは世界の文明学者の指摘である。

○秘められた空間があつてこそ、それが心の拠り所になる。神秘性があるというのは、普通の人間関係でも大切なことで、特に恋愛関係で然りである。

○歴史とは、上代に遡ればのぼるほど神話伝説に行き着くのは当然のこと。

○扇を国家体制の模式図に見立てるとき、日本の国体では扇の要は天皇で、この要は、三千年前から今日に至るまで、ただの一度も抜いたことはないし、今後変える必要はない。しかるに、共和制国家においては、4年毎に要を替えている。

○これほど知性や情操を含め、民度の

高い国は世界の中で見たことがない(ラフカディオ・ハーン)。

○日本人ほど善良な性質を有する人種は、この世界に極めて稀である(フランク・ソザビエル)。

○「国体」とは、成文憲法の背景にある目に見えない憲法である。国家の基本原理を体得していれば、成文憲法の必要はなくなる。成文憲法のない国家が二つある。イギリスとイスラエル。

○フェミニストの学者やウーマンリブたちが、これまでの我が国の家族制度はすべての悪の根源であるとか、嫁は家の無給の労働者扱いだとか声高に語る。現在の世の中には、凡そ聖なる領域に對しての畏れという感覚を有していない。

○万世一系の皇統は、皇統が女系に移行した時に断絶する。我々と同じ市民の子供に過ぎないとて廃止論が出てくる。

○教育勅語に替わる教育のバックボーンがないまま長年月が経った。教育の荒廃は極限に達している。GHQが衆参両議院に圧力をかけて勅語を消したのである。

○日本の学校で教えられている歴史は、日本を断罪する立場で見ている。国家に深い愛情を持つて見る見方をし

ない。

○日本固有の信仰、文化の総称としての神道は、古代から日本人の先祖が培ってきた日本人の心の有り様、そのことである。

○古代の先祖が発見し、古事記により伝承してくれた真理は、右でも左でもなく、天地の真ん中を貫く大道である。

○古事記上巻は宇宙創造の生成過程から日本民族の成立と日本国家成立の過程が書かれている。

○古事記神代の巻(日本神話)に説かれた宇宙論ほど天地を貫く永遠の真理が正しく示されたものは他のどこにも存在しない(ワルシャワ大学・コタンスキー教授)。

○国民に誠の心がなければ、国家は成り立っていない(会沢正志斎)。

○天皇の地位は、主権の存する国民の総意に基づくところがあるが、日本の歴史のどの時点においても、国民が選挙するか、あるいは意見を述べるかして、国民が総意によつて天皇を仰いだという事実はない。そんなことを自覚する前に、天皇は天皇であつたのである。

○現行憲法の改正については、先ず九条よりも一条について議論すべきである。天皇の地位は歴史と伝統に基づくことを明示せねばならぬ。「国民主権」という考え方が、果たして日本の国柄

に合うのかという議論は一切なされて

いない。イギリスもデンマークも「国民主権」という建前を取っていない。

○トインビー曰く「人類は少なくとも一家族として生きてゆくことを学ばねばならぬ。この人類共通の大事業に、日本が果たすべき先覚者的な役割があるものと私は確信する」と。

○共存でなく共生。共生は相手の考えがどうであれ、とにかく相手を受け入れ、一緒に生きようということ。考え方の違いを問題にしない。集団の理念や原則原理を問わず一緒にいる。そんな発想は、日本以外のところには殆どない。

○健全な日本精神であるかどうかは、各人の皇室観に現れる。以上

《読者の声②》 沖繩が危ない！那覇市龍柱問題

野中 一夫（陸士61期）

先日「住みよい那覇をつくる市民の会」のチラシを見て驚いた。親中派の翁長那覇市長が中国を象徴する高さ15m、幅3mの一对の龍柱を、観光のシンボルとして那覇市の玄関口、若狭地区に建設するという記事である。

市民に説明もなく、市議会の反対意見も無視して、国の一括交付金（沖繩だけに使う我々の税金）の内、2億6700万円を充てることを市議会で可決、現在工事に掛かりつつあるとのこと、我が国の尖閣諸島が中国に日夜脅かされ、沖繩も自国領とする魂胆が見え見えで、我が国の反中意識が93%の時、何故にこのような日本人を愚弄する計画が行われるのかと疑問に思った。

7月末、日本文化チャンネル桜の広報で、偶々龍柱抗議団30名募集の告知を見て、9月6日～8日の沖繩行きの旅程を申し込んだ。6日、10時30分羽田を発ち、2時間半で沖繩に着く。15時半より集会。地元の人、各地より集まった100人位で、地元の10年来自

衛隊の支援活動をしている老婦人金城さんのアピールを聞く。「翁長市長は市長4期目だが、中国の習近平とは23年来の交友があり、11月16日の知事選では、現仲井真知事の対抗馬として立候補を予定している。既に中国側に、6600万円の工事費で、中国産の御影石を使うそうだが、予算の内訳不明で、多額の予算が余った時は両者で山分けか、との噂も流れている。現在沖繩への観光客は年間658万人で、内中国人は約1%の7万人である。龍柱は中国人の観光客増加のためだと言っているが、龍柱の建立によって沖繩へ来た人々が、沖繩は中国領になったのかと誤解を与える恐れもあり、那覇市をチャイナタウン化する前触れでもあるので絶対反対です。」と訴えていた。

16時半、我々は雨の中を日章旗を掲げてデモ行進に入り、市役所に向かう。途中孔子廟や中国との縁も深く、市が後援している福州園の前で、シユプレヒコール「龍柱建設は止めろ！」「那覇市を中国の町にするな！」「翁長市政反対！」等を唱え、沖繩タイムス社の前では「反日新聞反対！」「親中報道を止めろ！」「中国の犬になるな！」等を唱えて、約1kmの道をデモリ、約1時間後に市役所前に着く。

ここで、龍柱反対の憂国の士の弁舌が道行く人々に訴え、最後は市役所内に届けとばかりに「翁長市長は龍柱建設を止めろ！」「中国の習近平におもねるな！」「翁長市政反対！」と大声でシユプレヒコールを繰り返し、1時間後の18時半に終了した。

7日は7時45分、バスで普天間基地に向かう。基地反対の左翼グループが基地の広いフェンスに貼り付けた「米軍は出ていけ！」「オスプレイ反対！」等の嫌がらせのビラや、ガラス片を混ぜた幅広いテープを注意して一つ一つ剥がす。約1時間の作業でフェンスは綺麗になり、次いで、基地内に招かれて、博士号を持っている温厚なアメリカ軍司令官の案内で、広い基地内をパースで見学する。今日は日曜日で米軍人の姿もなく、途中数機の黒ずんだ色のオスプレイが並んでいる間近な所で、司令官が流暢な日本語で説明をしてくれた。「このオスプレイは、以前使用していたヘリコプターよりも性能が勝れ、航続距離も長く、搭載量は多く、速度も速く、正に画期的なヘリコプターです」と述べられ、日本の防衛に力強い味方となる思いであった。中国は逸早くスパイを使って設計図の入手を試みていることと思われる。

次いで、昼過ぎに山野を抜けて、海

の見える辺野古キャンプに着く。普天間基地の代替地として、海辺では網を張った作業地が見える。我々より一足先に左翼グループの一団150人くらいがたむろしており、我々が日章旗を掲げて行くと、「帰れ！」「帰れ！」の合唱が始まる。地元の人に聞くと殆どの者は沖繩以外の人で日当を貰って来ている者もあり、現地の人には3～4人しかいないと言う。恐らく尖閣諸島等の日本の主権が侵されても、国益を守り抜く国家観の皆無の哀れな日本人と思えない者たち、それ程日本が嫌なら日本の国籍を捨てて好きな国へ行けばよいと思う。チャンネル桜の水島社長が「公開討論をしようか」と持ち掛けても、「帰れ！」「帰れ！」の空しい響きが残った。

我々は予定どおり、チャーターした漁船4隻に分乗して、紺碧の海に海風を受け、遠くに辺野古キャンプ地を眺めながら、沖繩で最も美しい海を約30分間遊覧した。新しい辺野古基地の誕生を期待して18時30分、ホテルに帰した。

8日は、那覇市内の商店街で買い物をして正午に空港に集合。13時10分那覇空港発、15時35分無事羽田空港に到着。龍柱建設抗議の旅は終わった。

帰宅して、9月19日（金）のサンケ

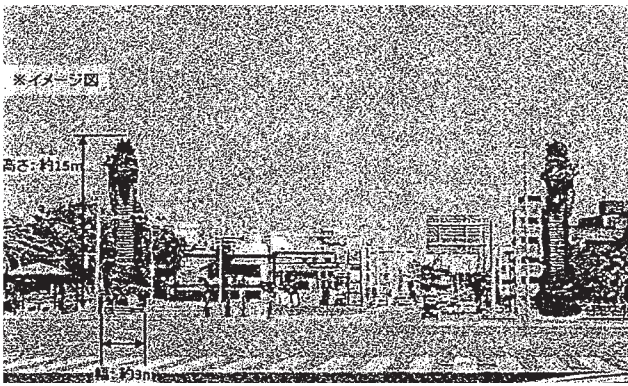
イ「正論」の、東海大学山田義彦教授の沖縄に関する記事は、大きな示唆を与えてくれた。

① 沖縄知事選は海洋国家日本の行く末を左右する重要な意味を持つ。

② 昨年3月、石油天然ガス・金属鉱物資源機構が沖縄本島北西約100kmの伊是名海域に、金、銀、銅などの資源量340万トンを超える海底熱水鉱床が存在していると報告した。この海域に眠る資源は約5兆円になると推定される。更に、今年7月PHD研究所発刊の拓大教授・惠隆之介著「いま沖縄で起きている大変なこと」を読んだ。サブタイトルは「中国による沖縄のクリミヤ化が始まる」とあり、沖縄の琉球時代の歴史から現在まで、如何に中国と関わってきたか、沖縄には明治政府による琉球併合以降日本の植民地になった故、中国からやって来た多くの帰化人の人々が琉球の独立を画策し、2013年以降、この反日の動きが高まっていると言う。中国は「沖縄住民は中国への回帰を望んでいる」と報道している。中国は沖縄の左翼勢力や親中派地元2紙を利用して「戦わずして勝つ」いわゆる「沖縄のクリミヤ化」を狙っている。

2012年の天皇、皇后両陛下の沖縄行幸啓をNHKは一切報道せず、翁

長市長も奉迎には参加しなかった。そして、今年の11月16日に県知事選挙が行われ、仲井眞知事と翁長市長の対決が現出するが、両氏とも先祖は中国と言っているが、習近平に近い翁長が中国の声援の下に知事になった時、沖縄は如何なる運命を辿るか、惠氏は大きな関心を寄せている。（9月24日記）



龍柱設置予定イメージ（若狭海岸通り） 写真：那覇市議会だより

《読者の声③》
「特集／神劍・宝劍・名刀の謎」源氏の重宝―薄緑・長円

（東京都会員） 根木 東洋

「編注・筆者の根木東洋氏は、元日本刀剣保存会・刀剣審査員で、当顕彰会の遺族会員を代表する評議員でもある。本稿は、刀剣等歴史に関する月刊誌『歴史研究』第50巻第7・8号（通巻563号、平成20年8月10日発行）に掲載された、神劍・宝劍・名刀の謎に迫る特集記事の一つである。

同氏の次兄根木禎二軍曹（戦死後2階級特進・陸軍少尉）は、大正13年生まれ、少飛11期出身で、飛行第61戦隊に所属し、七生神雷特攻隊隊員として四式重爆撃機に搭乗、昭和20年6月25日、東部ボルネオ・バリクパパン沖の敵艦船を魚雷攻撃して、散華しておられる。七生神雷隊の活躍については、別稿として本号に掲載。」



刀号「薄緑」の由来については、諸説あり、『平家物語「劍の巻」』によると、源氏重代の宝劍でもとは「膝丸」、後「蜘蛛切丸」、「吠丸」と変わり、義経が平家討伐に際して熊野神宮の別当

堪増から贈られたもので、義経は、特に悦んで「薄緑」と名付けた。その由来は、
《熊野より春の山分け出でたれば、夏山は緑も深く、春は薄かるらん。されば春の山を分け出でたれば薄緑と名付けたり》
という。

その後、功を挙げた義経は、この太刀を頼朝の手に帰したという。頼朝はこれを、箱根権現に奉納した。建久4年、曾我十郎祐成、曾我五郎時致兄弟が仇敵工藤祐経を討つに際して行実僧正が源氏の宝刀「薄緑」を餞別として授けられ、見事に仇討ちを果たしたという。

また、『平家物語』上巻「源氏勢太の巻」には、源朝長が、「薄緑」という太刀を帯びて・・・と記されている。後年「薄緑」は、徳川家の所蔵となり、元禄15年（1702年）9月12日、丹後宮津城主・本庄安芸守資俊の代に、五万石御加増のとき、五代將軍綱吉より拝領したもので、本阿弥光忠による元禄10年極月3日付、金子百枚の折紙が付いていた。本庄家では、さらに享保7年5月3日付、参千貫の折紙を付けている。
本庄資俊の父、宗資は、將軍綱吉の生母、桂昌院の実弟で、その縁から異

例の出世をした。

本庄家伝来の「薄緑」は、昭和12年6月15日、本阿弥光遜氏が引き取り、その後、政治家（犬養内閣の農相）であり、実業家であった山本悌次郎氏の所蔵となった。因みに本庄家より本阿弥家が引き取った代金は、当時の金で壱万五千元である。

長円は、銘鑑によれば、豊前、あるいは豊後説が有力で、大和同人説もある。長円の生誕については、元暦の頃（平安時代）と言われており、没年については、大分県国東にある、富貴寺境内の五基ある最も古い笠塔婆（昭和40年大分県指定文化財）に、仁知二年（1241年）長円と記されたものがあり、これが名工・長円の供養塔であると伝えられている。

なお、「薄緑」を号とする刀劍は、幾振か伝えられているが、箱根神社にある太刀は、無銘で「薄緑丸」、京都嵯峨の大覚寺の「薄緑」は、二尺八寸九分余りの太刀で、中心に○忠と銘があり、古備前もので、大正12年に国宝に指定されている。しかし、「薄緑」が長円の作であることは、既に吉野朝の永徳元年という奥書のある「喜阿銘尽」、室町初期の「宇都宮三河入道目利書」「観智院本銘尽」などに明記されている。今日源氏の重宝「薄緑」と

して、展覧会等に出品されている太刀は、この二尺四寸三分、折返銘・長円である。

本阿弥光遜氏の説明によれば、先年、福岡日々新聞主催の名刀展に、「山本悌次郎氏ニテ已ムナク陳列セル事アリ」とあるので、これが一般の目に触れたのが最初である。さらに、

《刀ノモノ折り返シハ徳川初期ニ為シタルモノノ如シ、ハバキー慶長金ナリ（ウメタタ式）》と続く。

《折り紙—本阿彌光忠書キタルモノナリ

三千貫ハ壱百五拾枚ト均シ、壱百五十枚トアルホウハ、

千代田城ニアリシ頃即チ徳川御物ノ折紙ナリ、之オ千代田折紙トイウ三千貫ノ方ハ本庄家拝領ノ後ノ折紙ナリ（之ハ光忠折紙）

〔附〕

黒塗葵紋蒔絵箱入り（拝領箱）

折り紙 二通

一、十三代本阿弥光忠 元禄十年極月 三日付（代 金子百枚）

二、十三代本阿弥光忠 享保七年五月 三日付（代 三千貫）

展覧会出品歴

一、源平盛衰・源義経展（松阪屋）

二、武将と名刀展（佐野美術館）

三、早創期の日本刀／反りのルーツを

探る展他

この度の特集テーマ「神劍・宝劍・名刀の謎」にびつたりと思いいベンを取りました。

【参考文献】

『日本古刀史』本間順治

『日本刀よもやま話』福永酔劍

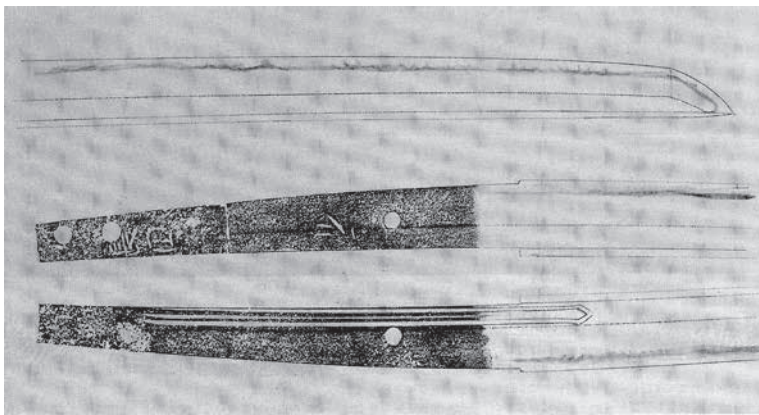
事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成26年7月1日～9月30日）

（単位千円）

- 五〇 山根 秋男 三〇 松本 聖二
- 二〇 降矢 達男 一〇 齊藤 達人
- 一〇 大穂 利武 一〇 西村 米子
- 一〇 西 正昭 一〇 松本 司
- 一〇 永野 博一 七 埼玉偕行会
- 七 高山 友二 七 山川 敏雄
- 七 石毛 信男
- 七 むらさき会（陸士56期）
- 七 丸井 容子 七 三宅 好美
- 七 服部 武志 七 松本 憲二
- 六 根本 紘一
- 五 陸軍空挺部隊靖國神社奉賛会
- 五 中村光太郎 五 中村 実
- 五 飯田 正能 五 飯田 雍子
- 五 長谷川史子 四 小原真知子
- 四 金子 亘秀 四 小貫 達雄
- 四 百目鬼 清 四 渡部 利久
- 四 岡本 巖 四 鮫島美知子
- 三 白田 智子 三 小山内昭三
- 三 内山 直子 三 清水 悟
- 三 後藤 英夫 三 深山 明敏
- 三 廣嶋 文武 三 伊集院雅英
- 三 斎藤 正夫 三 山田 昭
- 三 久保 巍 三 三河内健作
- 三 宮崎県自衛隊協力会青年部宮崎



支部

二	駒場剛太郎	二	工藤 重民	山本 淳	小松代己代
二	黒島宇吉郎	二	高橋 房之	吉岡 清	
二	信平セイ子	二	今井 敏夫	圓藤 春喜	齊藤 達人
二	阿部 敏行	二	関根 賢治	中西 博三	石井 令彦
二	河島 慶明	二	日高 誠	浜田 隆人	渥美 正明
二	谷垣 尚	二	衣笠 陽雄	山内美津子	南 徳恵
二	岡本 久吉	二	板垣 正	脇 勇	村田 朋子
二	茂木 昌三	二	藤野 洋政	安田 雄彦	
二	長谷川知幸	二	谷野 三次	静岡県 山本 志保	
二	鈴木 一直	二	古屋 七郎	和歌山県 七瀧 正雄	
二	中島 實	二	近藤 健	福岡県 牧野 洋子	
二	大塚 喜衛	二	山本 哲也	宮崎県 宇都宮裕司	
二	田中 清	二	山田 治男		
二	水野 清	二	石本登志夫		
二	嶋本 久代	二	水内 三郎	北海道 関谷 二郎	
二	中村 好之	二	武田 静雄	群馬県 安済美智二	
二	矢野 孝男	二	佐藤 義信	埼玉県 玉野 唯夫 (26・5・23)	
二	岩田 信一	二	新 忠信	千葉県 石毛 信男 (26・7・16)	
二	上嶋 正敏	二	早田 亮彦	東京都 佐藤 重由 (26・3・16)	
二	津覇 実雄	一	飯岡 哲子	鈴木 洋一	
一	市川 裕彦	一	杉浦 喜義	中里 重治 (26・2)	
一	三浦 正之			帯川 芳正	

御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿 (敬称略)

(平成26年7月1日～9月30日)

宮城県	山内 孝樹	愛知県	神奈川県
埼玉県	菅原 宏一	大阪府	渡辺 邦 (26・7・3)
	猪井 剛	兵庫県	丸山嘉久市
		福岡県	北中 忠敬
		広島県	福井 寛治 (26・6・9)
		徳田 裕 (26・8・17)	

会員訃報 (敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰まし、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

- 初代会長 竹田 恒徳 元宮様
- 二代会長 瀬島 龍三 氏
- 平成5年11月財団法人認可
- 三代会長 山本 卓真 氏
- 平成23年1月公益財団法人認定
- 現理事長 杉山 蕃 氏

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・広報誌等の発行
- ・講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内 公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4594

ご投稿についてのおお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内 公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4594